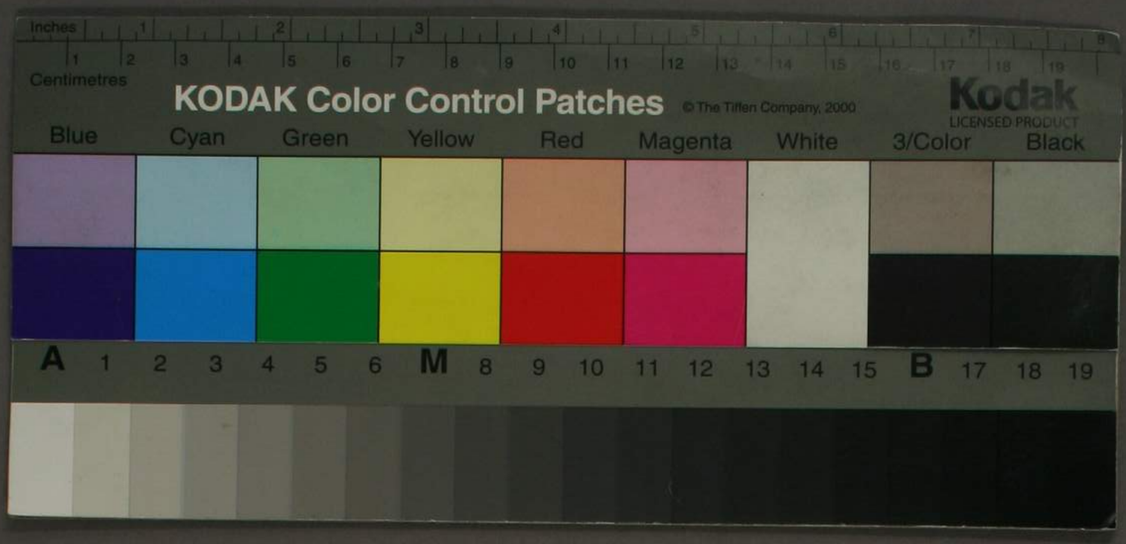

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

N 4
1971

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9
Tajima
JAPAN

特
門ル4
號4671
巻1

大崎寫覚

寺中行事　時正　高野の事　高野古の変

荒地物　牛房　藍　抱唐　落花生

食物、搗至豆、ニル、センモト　高野の実

蘇鉄御飯、蘇鉄がゆ、椎がん

醤油　所　焼酎　味噌　味噌漬

ヒンギヤ　半馬　狗　椎の実

イカ引　居室倉庫　猫　鼠　九竜巴魚　砂糖

蕨　峯谷山川坂路　数橋　高菱　井戸

婚姻　名　居処場　唐寅

南島新話附録

鳥号　地理　天変地妖　地震　法制

昭和三十六年四月十日　購求

行量 物々 交易
人品 大数 風俗
児童 幼女 漫遊 鞠打歌 手毬 ヲナベ ユタ
女名 ギヤギヤ王 手斧 姉様 細馨

暦日 神事 祭祀
二十日並五節句 祭文
二字話 三字話 長短 雛 文学 戯術 職人 歌舞
霊牌 神社 能 呂久米傳未
役目 服制 鳥獣
以上関係ある事柄を左に掲ぐ

大嘗会覧

年中行事

○年改まって立松寿元人来飾の餅門口に賑々
体裁は眼をもって看よ大松を掛 お婦次第に
松がとれ 元日より三日まで雑煮餅をもって初式
雑煮 黒豆 数の子 ごまめ 昆布巻 煮染 吸物引肴 盃事
焼肴 三ツ肴を備て祝盃 次に本膳 二の膳 三の膳 吸物 引肴 盃事
あるもの 其代友を招き 夫より お中飯 後の後 夫にて年賀を
終 夫より お中飯 後の後 夫にて年賀を
終 夫より お中飯 後の後 夫にて年賀を
終

共に下社の祭近し白米飯を食はずして
○二日迎孔明死れば亦一回迎孔
その家々皆に一とお家そとおせよ
祝いえ朝起求のかし
○三のよう仕職初穂並一名壱ヶ所
○五ヶ条の守句とそうして下社にて白米の飯を食
はせ焼酎呑は後おこより迎まをも
○吉軒味噌粥と併て七ヶ条の野菜豚を入れて煮る
夕飯に下社まで並て白米の飯 蒸物 を初めて
亜麻を掛らふ
○八ヶ条御掟種被おやの名各かうく一つと花盛乱
井筒持参酒あり
○十三日ちなそ毎家年祝とてゐる子の毎ふ
宵初てのみの日より子の年七ヶ条の事を祝の事
依て十三年之一度宛我年祝時祝ふて
等そそ祝ふ祝ふお名ふ祝ふ
お祭り年の刻より祝を始れば祝ふて
取舞して五更ふおよふ翌の年之翌の年生
の人吾年を祝ふ十二支共ふ同数故之毎年あく事
あり吾蔭のみく年々歳の祝の事ふ
○十四日床飾の併花 蜂蜜 吾蔭の爪ふあふて併を掛て夫を四角ふ切餅の枝ふ奥
きて長押(なげし)の上ふ置也く
○十五日今日の祝いふ下社の名迎ふ百有仕立祝酒のま
すふ事あり
○十六日今日お中一位祝酒を止めて迎ふ氏事由越あふず

已前七十五日迄びーが近年十六日あるニオぞ集て祝酒を呑迄ぶまで引続き迄ぶ事ニ而ありー欤ニ而ありー欤ニ而ありー欤

あり出来るどの子等
○三月三日の草餅を拵へ
流へ糸南とを持出よくさ
○四月初午の日、古代
ふおの寄り四月中三ヶ
玄迷てあてゐ初午の迷じ
○四月初午ニアつう子と云る事あり是い鴨の出ぬやうとの
祭寄り先附ゐやすやおよ
トの火壱お集う釜土の
ふ迎掛はぎまい午ゑ中
退支厳しく危或い石を
往古よりの仕来とついて
素妓の人ゑどを被お

退支遠慮ゑれそ居中
ゑつう迎ない往来の人を
ゑひて玩上ニ肩廊の差別
なしアつう子の迷いてす
ゐけり等ないめの作と止あ

時候

新玉の年立帰る初春よ　早暁よ
あれとも雨かちそ快晴こくも雨ふる春れ
気色あれ木伊ふ山鳥し春を告れそ高音
よく　ホケキョの声しばく囀くうして　鶯し春を告ぐ
情はるは愛すべけれそ吾藩の声張りの音を
今一耳そそい嗚呼持前の声をとの外意に
新らて覚の立我藩の梅の花一二本折し枝て木ハ
大木よもう一方の花瓶に挿の花のめくあるよ
梅の花と思い賞乾うて　こうは乗と
詠せ　ことなる
小の島二一木の枝咲くを見て雨乗霞む故伊の美

初花しちりまで過れど牧の声軒端をとゞろそ聞ゆ

花の枝遠く大空を霧ふ

芦一五月雨の空一りに燈火の光を遠くもの小径来の野道の

ふ新玉のつまこい山の茂れる

よく暑さしのくは雨ふれる芦の庵の夏き夢を驚く

ぼうう萩の葉うれを吹ける風のみ葉き山芦

木々には雨の花咲かで山ふ紅葉の色もなく染め木の葉

を染め木の葉を染めとかす雨はみの初とや降そ雨

うれやまた庭芦の葉より青く芦ふ聴そ暁ふ

芦を植てより野山花さく春の過ぎまで飢を凌くり

ふまうん暮ずく寺のいまたも松羽織の肌着貧

しき民も暁ふ雪ふべかりけり島ふれや

暑

暗地そ暑気に浴ふ

たゞを芝ゆ星山林芦木繁ふ馬場筋秋く

石垣よく庭ふ花を使ふ事なく演島ふれど

吹ずそふの故芦

寒

寒気我芦隣ふ信徒徹冷そ極事の肥着ふ半に袷

一枚袷羽織そ着上衣気を凌ぐ霜雪洋ふ事右ふ

れど寒ふそく氷りと雪ふれど常に扎型し

吹くふれど合きて厳扎の形ふ演ふ島林ふそ薩ふ

寒さ甚敷不そ平生の冷さ
皆人火鉢を手に取事
たち休中寒むけれど
ある事り夜ハ眠せるまて
たゝ打着の侭にて
田を打返し島なと打もの
実中居草の葉たちとも
を推量あるべし
○大島の気候の事一面降れ
も掛おては肌寒き事あり
掛おほーき事あり
つ日も降り

大嶋竊覧

○高頸の事

高頸等の事我ハ沈身とも
ふべきに付く今都に文化二乙丑の年代官醜とも下島せ
木田歌字先生の著る所
事當納米の事我ハ
享保十二年丁未大御支配の
検地此頃大嶋總高頸壱万
九百二反弐畝廿歩
年七石壱匁八分納米七千百二十八石弐斗四升八合弐勺四才
大御支配より去年文化元年の秋迄年数七拾八年の内二百七十
石壱斗七合三才の増ある所以ハ漁舟仕明地と云ふ者時漁舟

高壱万七千百四拾石弐斗七升四合弐勺壱才也
斗九升壱合弐勺弐才也
法城高當綱米一百四十弐石六斗四升三合
名瀬方
一、高額 千六百七拾八石五斗八升壱合八勺五才
内 畠高四斗九升壱合三勺三才
同弐斗三合八勺壱才
同壱升八合壱勺
現高 四千二百五拾七石八斗一升六合六勺壱才
（四千二升代）
綱米六百九拾壱石四斗七合
龍郷方
一、高額 千四百壱石五斗弐升壱合九勺弐才

藏地
没官数
仮屋地

外ニ
高額百四十五石九斗四升七合六勺弐才
右名瀬方切壱郷方浦村瀬名方ニ而
昨申出新有之高保十五ヶ年庚戌十一月分高橋外記取次法禮
文ヲ以外書ヲ通ノ瀬名方ニ
畑方弐斗七升四合九勺五才
隈高千四百壱石弐斗四升七合六勺三才
田畑高千二百六拾三石四斗三升四合
（四斗弐升代）
綱米五百八斗四石九升四合

没官数
仮屋地

一、高額 千七百五石四斗弐升
内 田方 千五百九拾五石五斗九升四合八才
（四斗弐升代）
綱米六百八十三石五斗五升壱合

畑高 弐石六斗(三)五升九合五勺
四斗五升代
納大麦 弐斗二石七斗八升三合
納小麦 弐斗五石八斗五升六合

赤木名方

一 高頸 壱百七十五石三斗八升六合六勺七才
畑高 六升六合六勺七才
弐斗七升五合弐勺四才
上木高 三升八合壱勺
隈高 壱百七十石五斗五合六勺六才
田高 壱石九斗七合八勺四才
四斗弐升代
納米六百八十四石四斗二升八合

藏地
役高帳

鹿兒島高等農林學校

塩漬高 六石六斗弐升弐合八勺六才
四斗五升代
納米弐石三斗六升壱合
一 畑高 九斗六合四勺三才
四斗五升代
納大麦 弐斗六石五斗五升九合
納小麦 斗七石七斗五合
瀬名方

一 高頸 壱百五斗三石六斗六升九合
畑高 百四十五石九斗四升七合六勺弐才
但名瀬内地御方引残
十有余石付改出高ハ五年成

畑壱斗弐舛壱合

現高千百五拾三石五斗四舛

畑高千百弐拾壱石九斗八舛

四斗弐舛代

納米四百八拾弐石三斗壱合

古見方

一、高頸八百八拾九石九斗八舛九合五勺三才

内 畑高壱斗六舛六合六勺壱才 藏地仮取

素保十五年破損仮作荒院弥作

田高弐石壱斗八舛壱合七勺壱才 損地引

享保弐拾一年洪水破損湯酒勺弥右衛門作

同弐石四斗 右同

現高八百八拾壱石弐斗二舛七合壱勺六才

四斗弐舛代

納米三百七拾三石四斗八舛八合

任用開切方

一、高頸千弐百拾六石三斗七舛七合壱勺四才

内 畑高壱斗三舛弐合三勺八才 藏地仮取

享保十五年洪水仁破損仮荒院弥作

田高四斗八舛 損地引

現高千弐百拾七石七斗六舛四合七勺四才

田高千弐百五石四斗七舛四合三勺三才

四斗弐舛代

納米五百拾六石四斗弐舛六合

一、高頸 千弐百弐拾石八斗五升四合弐勺九才
田畑高 五升七合壱勺四才
弐斗壱合三勺四才
現高 千弐百拾石五斗八升二合
四斗弐升代

納米五百拾弐石九斗六升二合
田畑高 九百五石弐斗
四斗弐升代
納米四百九石弐斗八合

栗方

一、高頸 九百七十五石五斗三升七合 壱勺五才
田畑高 九百五石弐斗
四斗弐升代
納米四百九石弐斗八合

一、高頸 千三百六拾石七斗壱升五合弐勺五才
田畑高 弐斗八升七合六勺四才
右其実破免取調帳下拔ニ付引
現高 千三百六拾石四斗弐升七合八勺三才
田畑高 三百八石九斗六升三合八勺三才
四斗弐升代
納米五百六拾石七斗六升壱才

実久方

一、高頸 千二百四拾四石七斗四升壱才
畑高 三斗壱合四勺三才
現高 千弐百四十四石三斗六升八合壱勺八才

田畑高千弐百弐拾弐石五斗四合二勺五才
四斗弐升代
納米五百弐拾三石五斗弐升
宇検方
一高額千四百七拾三石九斗七升二合五才
内畑高弐斗七升四合弐勺九才
現高千四百七拾六石六斗九升九合六才
田高千四百石四斗四升弐合八勺五才
四斗弐升代
納米六百四石弐斗三升二合
大和湊方
一高頭七百六拾五石八斗三升九合九勺九才

前地没収

鹿児島高等農林學校

内高弐斗九升六合壱勺九才
現高七百六拾五石六斗壱升三合
納米三百拾六石四斗二合八勺
御検地元
一惣高額壱万六千七百七拾八石六斗壱升九合四勺九才
当納米合弐千弐百人別出米船運上共)
七千百弐拾八石弐斗四升八合弐勺四才
針ミ 御試仕明 高ヲ
の島中当納米の事
一七千三百六拾六石五斗三合
内
一米七百弐拾六石五斗三合
一同六百九拾石五斗八升九合

前地没収

笠利方
童郷方

一同七百卯拾七石五斗卯升九合
一同七百三拾三石三斗一升壱合
一同三百三拾四石七斗四升三合
一同六百四拾壱石三斗七升五合
一同五百九拾五石壱斗壱升四合
一同五百の拾四石八斗八升三合
一同四百三拾三石七斗九升二合
一同五百四拾三石七斗二升七合
一同五百四拾七石六斗二升六合
一同三百六拾五石壱斗壱升壱合
一同五百拾壱石四斗弐升弐合
高保十二年丙午十二月卯春行接地總高壱万六千七百七拾八石

赤木名方
名瀬方
大熊湊方
宇検方
西方
実久方
栗ノ方
渡連方
住用方
古見方
瀬名方

六斗壱升壱合四勺九才ニ御定り同十三年酉七月廿五日御検地帳相渡是高保大御支配と云天明三年大島湾国元惣高壱万四百五拾五石五斗と相記慶長薩藩の御検地島をまね有之事ニ候

○高配當の事

田地配當の事最中洞切と一軽き洞(とぶ)と云ふ五ヶ年に一度づゝ洞切の中の人数に惣高(てい)て田地引見十ヶ年ば田地等引ざる近き地面ゟ配當す故に村大ニ人数多ければ少く高ニ配當す村小ニ人数ニ高多ければ多く高ニ配當す又其村の高人躰に等き村ニ人数多く高ニ少き村へ配當多く又年ゟ人人歩人ゟ人数ニ高主なれども夫役勤ゟ人数ニ未高配當に預ぶるもの有故に年ゟ村をにて又右の如く村中の惣高

村中の人躰に於ては當ても當ても号て是を高割とゝ

○ 郷士高の事

前文にいへる如く當高の外に郷士高二種あり一種は籠郷方に籠住
屋敷田畑を所持して居る者 郷士格まで郷士高賜ふ納米拾三石四斗七
升九合西方の四里実統郷士格まで郷士高賜ふ納米拾三石四斗七
九合是等返上郷士格を免と賜ふ人なれば郷士高を免し賜ふ事
なし 惣郷士格の名前番組別に記す故こゝに略す

○ 栗の事

中島の吉右衛門といへる大島へ渡り語りを守けり 徳島栗を
島ごに作らせ其の語を守ること何ぞや
山みなり夫とは栗ばかりして植を
ず次の郷りて就見そは行を勤の内に直に蛭ら場より栗を

荒地打之事

荒地を打うを時の男女あの業之
女子十五才より廿五才迄の
誘て立廻人てイトをそ
向くそ同廿五山鉄を地に打込
時も切ニく又か勢よ行き
名はてか勢を乞ふをよ
芝十五人そ荒地を面白くきる
々へか勢を出一度返夫を請て
して大家有福の者い度夫を請て
又は四一の四十余をして荒地
木四五才位の女子ゟき
あり

地の位と上々土を黒ふ土て
砂地ふよて能く
秋九月十日耕種蒔し早稲を
彼岸前後植る四五月
熟す豊を二毛土と云八月収
大和の法役大ふ事をふ
二本堂小川事ふり
田地一畦稲三束有りと云束
摑り充ふ合て一把とし其把又三合て壱把ニ当ると
一たばりと云米ふて四升あるを一束ふ米四升と云ると云
其ハ今の京盤之助改掛の事ふり米四升 数ふて
升ふるべし一畦ふ稲ニ束ふり京盤ふ米ふ升ふ
踏ますニ石束田と云事ふり
ニ石束ニ米ふふて検地
ふい検地院陳事貢米ふ
赤しそふかふ
京子保大阪支配
三ノ印島の和州

牛房之事

名所多印山右村ニ亀蘇庵と云ふもの有り
年々牛房を作り作る故ニ其茅を買ふ春は
二月三月四月秋は七月八月九月ニ苗を植そめ冬苗は実のいさみ夏苗
吐く日照に痛みて近み西ニ一とう八月牛房と云ふ地ニ植
地を深く掘ふかし又三尺斗地をほり別ニ
二ヶ月目ニ植すれバ長さ三尺斗ニ成ル
其一種を苗て其上ニ又馬糞を置く苗数ハ
多く切込み畠ニ平等ニ打とふり
ふり今作り置きと云七八枚重ね作り
隙ふ置きと云七八枚重ね作り
引取ル時ニ大くふりて其ニ用ふあり

とゝも種紙調ふるなはこやしなど肥手を上を植付生て夫より出たる種を苗は純と云

蔦之事

蔦の事をウデと云此作至て手当きことなり深山或籬辺なと草木の立茂りたるを切薙夫に次をおけ焼前一蔦の種子を落掃て土を掛すこと俗草刈の事なく純業て程も大きは一尺七八寸まりなりて天王寺蔦と云方る一かたなり　五六月比苗て肥をこと三年目より見ハ三年種を磯辺の地の別して能肥たる地之苗時ことなり二月一三月の種を苗は根入ことなく葉のみ茂るとい

抱(ダキ)居(ヨシ)之事

ダキヨのことがクキヨと云時多くは作て煮と塩漬にし朝夕飯の添物とす四五六月に植こと四五六月に取る

植てすぐ茅の出たる比上に葉を一重落く振て其れに火を焼は苗上の蟲と生る外に手入おくけ方もなくよりよし

落花生之事

落花生の事を地豆と云地中にする豆故落ても得たり三四月比苗一二寸位生出たる時能大抵一二寸位生出たる時能植る時は塵埃土の能肥たる所五寸程に穴をほり植る時は塵埃土の能肥たる所五寸程に穴をほり植る時は塵埃土の能肥たる所五寸程に穴をほり

一、海苔は凡年仮料の初を見て初とし
一、煤海苔とは下ゝ色の海苔あり見は正月より四月
　頃迄瀬に生ずるなり　計にして青海苔よりの上品なり
一、川苔とゝなる色苔黒く形糸のごくして左三四寸位
　のなり鰹節の場に鮪或ハ鮮魚を交るもなり
　川下の河原の小石より生るなり汐干の間に一日二十分ゝを
　漸く一掘りを得るなり女共の仕事にて時明さる仕
　事なり紅と若し煮染るなり
　右に用て至て上品なり食し方ハ清澄のごとを大略で
　まではあるべし又アエモノ汁ハ勿論ソ木又ハヲコゼモンにも
　最上ニテ酢味噌もよし　アエモノ（アエ物の人十人に九人
　ハヲコゼモンとハ島にてよく鯖ありと云
　能り煮迄れも柔かく迄て黄却よくあしゝ汁の湯上り
　たる時かまたるとき
一、白菜とゝなるもの三四月迄の間河原の軽石に生ず
　ほいよー形如図アエモノ或ハ煮染或ハ煮浸ものよし
一、ビルとゝなる図のごときものあり雨月より五六月まで生ず
　レモノ或ハアエモノ等に仕ずれも仕ずれもよし一名アエモノ
　砂多くして食ふべからざるものにもあらず
一、藻　三四月比生じて形如図アエモノ或ハ汁にして食す
一、イギス海苔とゝなるもの多し三四月生ずトコロテン海苔に似たり
一、ケナシノリとゝなるもの多し三四月生ずトコロテン海苔に似たり
　アエモノにして食す形図のごとし
一、ウウルとゝなるもの多し形図のごとし海中浅瀬にかんと

云々のあり夫に生るもの葉を煮て絞り水に漬冷
一面上げて頭気を抜き味噌漬にし菜蘇漬にも
勝れたる物なり菜蘇漬には生の侭そしする随分旨
一、汁ノリ麩ノリ外にあり
一、天辺菜 八九月頃
おそく苔けは大根と一時に生る草なり天辺菜とも
大根同住の時根引
陸ら食はるるものなり

ヒルセンモトのを

ヒルセンモト大根同様の植やうなり ヒルはピルセンモトはキビ
とも何れ畠を打返して其に溝を立てそれに豚糞を
施すなり豚糞は豚屋の糞を用ゆるなり人又は豚屋に大便を

通して豚の食とする故に豚の食い残しなどを豚舎の糞汁
入置し交ること或は馬糞を用ゆ是は馬屋に淀砂を入れ
置一七日程馬の大小便を踏交へさせたるものなり夫を一七日間若
腐に五揚げ施肥の按配を用ることなり右糞汁の上にそす肉
程づつにヒルセンモトを植付追々長するに付て肉を浅くそよ
ヒルは長すれば逆手をもまきて日々に野菜に用い根共に引とる
こと稀なりにんば我儘のものより白い落く香味の菲の倍白
ひなり 夫れだけ味も大根菲に異らず ヒルの根は塩漬にし
砂糖を交へ置て漬物に用ひて白いまき故に随分食はるる
センモトも葉は冨の落くるまで根を引て肉よき程に成りたる
侭は株とともに根を引て両方とよく洗ひ株の肉をカー先引ぬ
追々株太りそき株を何箇も引ぬき株を失ふことなく
種とする五六人の家内ならヒルを三四枚取センモトを五六枚取

も植置て毎の菜にルセン又トの野菜を朝夕汁に雨種共に本株を失はす根に重宝の二至あり株共に3取る分ハ五六百も して土六枚位は種可り根を脇より堀取て株を割ること勿ず右ビルモトを欠ところには

食物　正を見るやきもの

一、マナつへつ　一、アンバヂ　一、ヨスクゴリ　一、タンキウ
一、ムタつつ　一、ケカ木実、椎ノ実、ドトラボ　一、コゴル　一、クガ
一、アノイ　一、ヌスロイレビ　一、フクマン　一、カマイレビ
一、バレヤンメ　一、ウシボブリ　一、コバイレビ
一、ヤマ芷（蕨ハブ根ハ灰）　一、ハンタマ　一、ヤマトイレビ

蘇鉄之事

南島は吾藩の隆沢を蒙りて今日を送ると雖も海上百五十里を隔れて秋より翌春にかけて大風数十度吹りて米麦外雑品に至る迄ふとも乏敷ふとも欲に求むへき便りなし仍て蘇鉄を野植て必用の用意とす先ハ蘇鉄を仕立るまでの間ハ小茶家程ろ上の根ある蘇鉄を欠て十月より三四月まで植る之来芽の出さゝ内植てよし三四月以蘇鉄を多く持てる者ハ向ひ小宿村の真壱部志ろ上の鉄を買ふ十月雪月ろ植付ぬ上ハ先根付て来春の芽ハ能出るとて植るこゝすゝて掛れなる時長遅く半ば土を掛て蘇鉄の廻りをとぢ山鉄（ことつへ）の脇うて能し堅めて動かぬ様に扱し並ろありに蘇鉄のよ一つ植付るが真壱庭に手目

植て乙女子蘇鉄菊の葉きものは葉を切て植る
ものは風に吹倒されぬ為五六年も経れば長け七八寸に
成て随分切て能き子を欠て根ごまで下る石を
去て植れば能く長すと云つ兼て肥等用るを
よし植付るに馬糞を去て植れば進みよと
云つ沖一の肥い鉄気の進み悪く成たる時は
水なくそを埋或い蘇鉄の進み悪く成たる時は
鉄を切て食するによく新
蘇鉄の製法悪しければ
法よろしくて純を選らに
干次茅小食製の條に記り為つ蘇鉄を切て机板
蘇鉄擦りをおもりて喜うう粉を
取り腑を去方斗つく葉切をつかく晴て二三日

乾し夫を楠え入れ水を注込二三日漬て蘇鉄を折て見
るに折れざれば未一両日漬置て折て見るに折るに折を好
揚て又干揚げ夫を俵に入れて踏し又折て見るに折を
好俵より出して水まで純くなるまで洗いて揚げ白まを揚前も
フルと云々揚てはふるいして粉にし一
夫を飯まで粥まで食するこそだ手ごの入るを
よし右蘇鉄粉を俱にして味噌まで粉醤油まで煮
て食し或い砂糖を交へてもし菓子まで焼酎も煮ろ
よし千切は生んに仮りて砂糖を交れば重て堅
き飴まで粉醤油まで吸物まで椀し入れ等最上よし俱ハ
細く薄く製ては一夜とよくこと云ずとそう
尚に下人杯食する蘇鉄の皮ぶつくは粥とも云者を
食するを見るに灰水のあめきものを用ふ中と目す者就

きものをとおいに芝に催あつて米を交へて焚たんだ飯ばかりを蘇鉄斗を水のめくてどドカキとたべたものをたべるのをいふ又蘇鉄の種子のことを十りともいふ十りも飯料を食ふ時は平飯用意悪い虫も付事おくれ食する時出ーせ芋生卵などを二つづゝ割皮をおりそこへ胴丼き大夫を椀に入れ水にうすて汁を指て其に沈みたるを味噌に焚て食すれば実は粥に焚くと米よりも格別多分す米を合そして焚んのより蘇鉄をそんなに入ずとも美味あると蘇鉄を多くすれば粘気を生ずるもの悪しき種子の方を武抜石

椎の実之事

大島の大山ことに椎木多き故椎ノ実多り生ル年ハ莫大ノモノなり島中男女精ヲ入レテ拾ハヽ椎ノ実ヲ指と朝夕ノ飯料トス蒸し或ハ煮テ囲爐裏ノ上ヶ又ハ日ニ干実ヲエリ分ケテ飯或ハ粥或ハ味噌或ハ焼酎或ハ蒸菓子ズ椎実ノ飯ハ前晩ヨリ水ニ漬置テ焚時ハ放煮立ヘトゝヘヽり米ト交ヘテ焚ニハヨロシクシテ味噌又ハ焼酎ヲ実ハ半分モヨリ一倍半ホド上ハ時米ヲ打込焼酎ヲ実ハ半分モヨリ立ヶり又ハ椎ノ実ヲ粉ニシテ焼酎ニナラス唐芋ヲ交ヘテ焚ケレバ椎ノ実ヲ好ニ関ハヌ焼酎ニ栗カニシテ最上ナリ外ニ仍授ノ実ヲ焼酎ニ漬ケレバ是ハ焼酎ノ香リ別テ多ク殊ニ泡盛ナリ蒸菓子ハ餅米半々交ヘテ湯ヲ注シ又形菓子ニ湯ヲハ粉至極細末ニシテ葛ニテ調ヘルハ菓子ニ似テ最上ナリ是ハ米ニテ

調へ九形葉よりも色白の却て蒸し或ハ煮へ
ニテ付置火を去ラスシテ貯フレハ
故ニ椎ノ実ヲ多ク拾ヒ
ヨリ岸モ湯手過テ皮剝ル時ハ多ク手ヲ経スシテ出付ト云九
月末ヨリ椎ノ実ノ生ル年ハ翌年迄モ拾フ
シ比九月ヨリ塩焚ヲシ砂糖拵
リ砂糖モ奥ニハ島民ヨリ服ヲ得サル時ニシテ霜月ニ至レハ
拾フ人ナシトイヘリ椎ヲ拾フ事至テ難ケレ物ナリ大島ノ山
総テ巖石坂道而已ニテ夫ヲ踰越ヘ椎ノ実ノ落ル所ヲ
其日ノ内ニ渓川ヲ汲テ絶望ヲ越ヘ椎ノ実ノ落ル所ヲ
ノ拾ヒ上手ハ一時ニ弐斗余モ拾フ手籠ヲ背負ヲ入レハ漸々ニ
中ニ納候ナルモノ又三四里モ奥山ノ椎ヲ拾フニハ前ノ如ク矢ヲ
治リ翌ノ朝ヨリ拾ヒ帰ル島民之ヲ天路ノ艱物ナリト苦労ニテモ拾フ
リ

食物之事

一、島ニ米ヲ作ルヲ専ラ唐芋ヲ多ク植テ第一ノ食トス
唐芋ヲ作ラテ実ノ入ル迄ハ外ニ
求ムヘキ食物ナク甘藷ヲ上食トシテ外ニ
草海苔煮ヲ食ス其ヲ食物ノ凶荒ヲ
書ヲ左ニ記

一、十人ノ米五合ノ飯
一、十人ノ米二合ニ青海苔ヲ入テ飯料トス
一、十人ノ蘇鉄一斤米二合ヲ入テ飯料トス
一、十人ノ米一合ニ蘇鉄ノ実ヲ交ヘテ飯料トス
一、十人ノ米一合ニ蘇鉄ノ実ヲ交ヘテ飯料トス
一、十人ノ蘇鉄一斤水飯ニシテ飯料トス岩ヲトカキ
トラ

一、十人ヲ粗実一升高菜ノ茎ノ物入レテ仮料トス
一、十人ノ唐芋二升ノ水粥ヲトンブントモ
一、十人ノ唐芋一升野菜ヲ交テ食ス豆ヲツブリ
ヌトンズイモントモ仮料トス外ニ同ジ
一、マナツトモノヲ仮料トス外ニ同ジ製法ヲ等
一、コゴスタトモ柱ノ粉ヲ能ク製法シテ食ス外ニ同ジ
一、アンバヂ里芋ニ仕立ヲ知能ク製法シテ食ス外ニ同ジ
一、アリチトモ木実ヲ仮料トス外ニ同ジ
一、百合根ヲ一人ニ一厘宛盛上テ仮料ニス
一、テコチトモ木ノ実ヲ仮料トス外ニ同ジ
一、トウツロウヲ仮料トスカボチヤノ大キナモノニ

搗豆腐（つきとうふ）

米ト大豆トヲ等分ニスルヲ大豆ハ茹リテ引臼ニテ細末ノ粉ニシ
米ハ水ニフクラシ白ニテ搗砕キ大豆ト米ト能ク振交ヘサラ
ニ剛クコネ鍋ニ水ヲ入レ俗ニ仆ノ如クニシテ煮立テ
ヲコネ芭蕉ノ葉ニ包蒸シ切リテ豆腐ノ如シ

菲巻（ひろうまき）

一寸位ノ海老ニ塩ヲヨクシカケ能ク揉ミ菲ヲ細ク切リ
打込ミカキ交セ直ニ引揚テ右ノ大海老ヲ菲ニテ巻キ味
噌ヲ搾リカケ交ヘテ面白キモノ

ベラ餅

蘇鉄ノ粥ヲ製シテ食ス外ニ同ジ
芭蕉ノ葉ニ包ミ蒸シ菓トス

ニョウダゴロッカリ

蘇鉄飼

蘇鉄の粥ニて食ふ所を飼に用ひて奇効あり

蘇鉄ガン

蘇鉄のせんと併米とを粉ニしたるを水ニ交へ粥の如くニ合せ砂糖を入れて蒸菓子にもするか城ノ越ニ合せてもよし

椎ガン

椎の実と併米を細末ニして蘇鉄と同様ニ調ふ蘇鉄ガンより小ク合せねば剛くなる

味噌之事

味噌の梅花あまた有る故ニ事多くこゝニ其ことをこゝニと云

一、大和味噌

右ハ米こうじ糀をたて大豆を入れて搗く豆ハ大和味噌とよびヨカこゝニより云か減ハ大豆糀壱升ニ入れて搗く何れも麹立行る也夫を三升五合ニ合ニ塩五合入れて搗くこと故ニ米三升を麹ニして升落一升五合を入れて再搗升の大豆を別て他ニ煮置塩三合ニて搗く豆ハ煮汁ニて甘落一升ニ大豆二升ニして甘落麹大豆塩掛合たる別て味いよ〳〵ヨし大豆の搗ニ小豆ニて搗く時ハ通ニ搗く時ハ通ニ小豆ニて搗く時ハ通ニ搗く時ハ通ニ小豆ニて搗く時ハ通ニ搗く時ハ通

非共に又梅をするとう又唐芋を千切にてをろし
水に漬せんをそう干かすをしぼり炭天と雨の斗
乾て米と交へて糀をたて大豆を入れてこそと揚く
大和味噌と異る事なしとぞ

一、垂糖味噌
焼酎の垂糖を麹にたてて大斗の塩を入れて揚たる
もの之大体かすは中瓜の葉とうき島中瓜をそ粉す
るものをもて締るなり又タレカスを仕する故とつくりかし
スこあるもの二芝し鯉の奥杯を垂左る陰ら食ぎ
ものなり

一、糠味噌
焼酎の垂糖の麹と糠を入れて揚く

一、鰯味噌　鰯ノコうが(ママ)ん(ママ)ト
仮名つけり

鰯に塩を入れて味噌とす

一、苧麻鉄味噌
苧麻鉄を麹にて大豆を入てつく色甚く別てき
れいな味しよく最上の味噌なりと

一、椎味噌
椎の実を麹にして大豆を入て揚、色黒く見分る事
なくそ味は甘みありて勝れたりとぞ

一、百合味噌
百合の根を麹にして大豆を入て揚上味噌とぞ

一、テエチ味噌
テエチ味噌はテエチとゐ木の実を麹にして大豆を入れてく

一、醤油味噌
平仮名そう味噌の様之用ゆれそ米そて麹をたて

つけば大抵上味噌漬と云る
味噌漬之事
一、魚味噌漬を好あり味噌漬る者の先ず記す
一、豚皮目肉は勿論脇迄小味噌漬置其上
の味噌漬は脇に水分手にて干あがる時漬皮目
と肉は生の侭にて置豚は脇は勿論皮目肉迄ふ
かせ煮て干あがる時漬る者侭刻みて盛客
の用意とする
一、鶏卵の味噌漬は煮て皮をむきて漬る三日にて宜
一昼夜にはし漬生は三ツ半位漬置
急用の用意とする者侭切て小丼もの面肴とする
一、イカ鮹を煮て味噌漬るを急客の用意とする
乾松茸同料急客の用意とする

一、サワラ煮賭度を生の侭にて味噌漬にす者侭て小
井物を用ゆ別て賭れあり吾藩ことの賭空狂賭る
一、大根高菜トウナブロ紅トラ紅イギリリルハナ牛房
タチワキ昆布糠杯の類味噌漬あり糠の味噌漬は味
噌を掏入る時梅の実あて何し境よく直に味噌
を漬置は味噌を仕侭て糠出たる時取上けて用ゆ
最上とそいふれそれ思いの外の侭ものあり鉢米
の糠の侭米ある味よりと云
醤油之事
一、味噌小麦大豆を醤油をとる目当し
能き醤油ある者又米と大豆とそ醤油をとる
とる是は別を最上とする

配法は大豆六升塩六升水一斗二升を以て製法
は[illegible]麦を紅く煎り大豆を紫色に
荒く引き麦と大豆と交へ置き夫に右の麦大豆交せ合せたるを
へて上へ筵をおきて又青菌を筵へ筵を覆い置
一、醤油とあり別て最上なるもの
たるものなり
一、水一斗に塩三合を以て最上の大事の醤油あり

醋之事

醋は砂糖桑の絞糖を又絞りて夫を壺に入置けば最
上の醋となる程久敷なり夫に焼酎の垂

糖をとき水の如く焼酎を又たれて入次は絶ることなし
又砂糖を製する時一寸宛に鍋を洗ふをもり
汁を壺に入て口を取置けば最上醋となる

焼酎製法之事

米を俵となし焼酎をたれて斗を麹にし弥り
武斗余を紙かし戒の飯となる時一合を押掛く手にて麹と能く交
成りたる時廿延の上へ合せ能冷たる時熟に移し米を俵の通込ふ水武
斗程入て能くもみ崩し頻の口を石置也夫より夏の
は五日目に掛わけて汲かし戒粥となれを箸をしてする
加減る水を掛かくき夫より三日目位と為すること
寒中は水を七八日目に変へ夫より又七日八日目に為

するより日数は寒き候にて乙斗ふ煎する時は下地した焼酎を蓄て見るに甘く成たる時煎するなり麹の能くたらざる時は麹ばかりに水を入て所く甘くなりたる時煎するをよしとす麹の立かゝりを見斗い初発方け置たる寸計位のものを残し飯を焚入るるなりき候よき計の麹は麹よくきたる時の時なり煎する期に及人て初りのか残水サーとて水を指かへて煎ずれば平焼酎泡盛らすと云又下地一たる焼酎を水に落し入るに煎し其文の次第は鍋打にあらざる容器なることなり鍋の底輪を巻せそ上に朔を重せて上に水をいれ鍋を入れ煎し毎一束ずつ上の水湯に成たる時いま水を替ることなり焼酎の無糖を

二度三度四度五度迄煎するに例と位は劣るとけれども焼酎無ることなり二度目迄は初に替るをそとなり煎一様なれては秘伝の仕授あることなどそ心得細かなる事一耳に聞ずず

焼酎をしぼり入て五日位より後に水を入れ次く時に麹の禿れざるものは面揃けて強のめく葉て冷し置ヨく夫を又入置て能新々葉すれば焼酎の無糖多し

と云

造酒製法

神事ニ参ヲ行ヒ酒造桶ト云ヲ製スル日ハ
餅米ヲ能ク精ケ水ニ浸シ置キ翌朝ニ至リ白ク細カニ搗砕キ
大鍋ニ湯ヲ滾シ右ノ餅米ヲ湯ノ中ヘ右ノ粉ニ一ト握リ宛継ソ
ヨクカキ交ヘ加減ニ煮タル時下シ桶ノ清タル所
ニ移シ置キ夫ヨリ耳藁ヲ水ニ浸シ置キ右ノ餅米ヲカキ交ヘ
右ノ物ヲカキ交ヘタル餅米ヲ米ヲ舂ク片手ニ一ト抱位ノ
束ネ入テ又カキ交ヘ壷桶等ノ器ヘ移シ芭蕉
ノ葉ヲ露ヒ口ヲ面器ニテ覆ヒ置ニヨリ能テ味ヒヨク
耳藁ト交ヘタル米ヲ鍋ノ上ニ置キ交ル時鍋ノ下ヨリ火ヲ焚
ク温シテ交ヘタル造酒ハ炊ヨリ出来ル日迄ク

置日ニ当来ルヲ待テ右耳藁ヲ入ル時ハ水ヲ加ヘ
調ヘ味ヒ甘キ酸キ好ミニ応ジ造酒ハ女共嗜好キ調ヘ
甚タキタルヲ好ミ仕ヲ以テ何故ニキタナク嗜好キ調ヘ
と向タヲ往々平家ノ両方ニ稲ヲ作ル造ヲ数ヘ給ヘ
そ呼ブ者ヲ云事ヲ知ラン者多シ生米ヲ嗜好キ
見セ給ヒテ夫ヨリ改今ニ改好キ調ルヲ云ヘ
為潮モ日ノ前ハ泊テ嗜造酒ヲ調ヲ
ニヲ止メタリ如レ此ノ名酒ノ内浦上村ニ今ニ嗜造
酒ヲ調ルヲ浦上村後ノ山有盛ノ古跡ト云伝ヘ
あれは此村中ノ事ヲ養ヒ能クソノヨシ西方
ろそ嗜造酒ノ調方ヲ年若キハ女半時計塩ヲ
酢キ又紙ヲ能ク持ヒ向歯ヲ二嗜三嗜位嗜テ

交ゆる迄たるとき

砂糖製法之事

砂糖を製するに当年初一の産ままで島民二の産業をもつてごとくの人もなく一平常しなれどもの製法のごとくあれども無人向や横目をおめそて請事ゆえ其ー条横目ゆえるの職掌にて掟条又条年外下役まて九月より来二月迄昼夜行通り請下知書御褒美ゆえ製法ゆ付ては更に懈情する事なし然製法の次第巨細ゆ記すべけれども今てゆ形様を顕す

砂糖製法（附録）

納米七千石
砂糖四百六拾斤
代米
但一斤ニ付三合許ゆ四分代ゆ

砂糖許弐万七千三百五拾斤
代米四合代
外ニ
三万九千六百許拾斤
三万四千二百九拾斤
右試行両度ゆ

原吉永上納ゆ

四拾斤引除申壹ゆ
五拾斤ニ付

住用
龍郷

永萬五千疋
但銭弐千疋ハ右同断
指五萬疋
但右同断

三拾八万参百五拾疋
但右同断
参千九百七拾参疋
合三拾参万千弐百五拾疋
但代米四合ニ付
右同六萬弐千五百疋
但代米右同断

宇検
名瀬
嶋中

代銭

童富名宛買置

種子屋知行買置

於弐萬疋内 但物成米銭代
但鍋鉄輪市受候代ニ拂の分依自上拂高
右之内 米申受分
但代定ニ拂の分代米
右同
但買置代右四合ニて
右同
但重富種子屋知行買置
右同
但樽代
右同
但此外上荷反返備ニ裏印ニ銭也
備ニ裏印ニ土産の反返とも同あみ天同放通

仿備故表之云 如此 あみ素焼の茶入同
蓋層聖寺院陳ず蘭茅並焼心草を後と
あるこそ

柔は元禄十年大和濱西濱采に植付お試候而其時の例
とをその砂い砂糖石試候而其時の例
中ゝ流行いたし 申
砂糖を水車にて製するを云 此
り立製す水車の砂糖を製する事の車の一面に汁二石余と記す知名
し 牛馬の力を用て製す
陳の有交物産に心掛草木草種の類毎々自ら鳥趣
に仕立る中流行せ交不足有 お仕立る処の竹は方
傾斜竹は る中の用才不足有
数十所の日地竹山あり生る天の竹大さ尺余まるものあり
る中竹山と云程の處は此山を限る又有度工夫をいて

金輸車とおもの作出又木口車と云作れ用を
報す如れを る中一統あ用致候 用
弁す木し車より柔けの車は五て用を
車金輸車を用ゐ候に一二ヶ所今は る中金輸車
を用木し車け金輸車す於る也大凡五近年
松木車の用をます木共カ
砂糖梅す 高サ一尺五寸 口差渡七尺
五寸、蓋高サ五寸 四方 梅一丁ゟ鉄針
拾本 茶竹六筒 寛政元酉年改
より於七ケ年ゟ
梅のくれ木 柔用三尺 長サ七尺五寸 厚四十分也
元ゟ凡八ヶ日 寛政元酉年改
極上ゟ柔一時に砂糖八拾七ケ内外 寛政元酉年改

一時百斤歟也　中条は六拾斤下条は四五拾斤より
計条は三拾斤余の歟例なり　天保年中代官三泉
善兵衛条仕対上中下三条ある条一丈五六尺を畦に条
も尺の立ちれば砂糖拾斤と見積
砂糖製法　冬十月より車を立牛馬に挽すまた
水車を仕掛建所より車三つを一組とし条の大きさ弐本
三つの車にくりせ中の車左右植すれば左右の車左植する
車三つ共に廻る条の汁無を再前の入れ石灰を掩き交へ
鍋三つに入所に焚五に移し後一つ鍋に移し棒を以て交
冷て上品の砂糖とするなり加減は家々の習有之
毎々の並例の条汁を牛をして砂糖とし七斤あるは拾
上五斤半又六斤有は中位四斤半有は下面也

ヒンヂヤの事

家々ニヒンヂヤを十疋十五疋ては何国とす我藩の
野牛のごとく乙見を琉球よりそはにつじやとゐにつじを祝そヒン
じやと云ふべし牧を仕立ヒンヂヤを十疋五疋作り牧飼にて商売
をするものも有ヒンヂヤは羊の祝言のやウナント
羊は条も毒ともなるもの条なれば羊は外三種数あるべし又大白
羊黒有南而不用羔仁熟之不鳴救之不噂夏死
羊羔の数ふて疑ふべからず　ヒンヂヤの行れ

牛馬（附猪）

牛馬千四五百余年已前より有しと云伝には其大概十匁一の価と計考春秋訪死する人の外向切横目より始て牛馬之攻の取締の役場を村里定式牛馬と相撰る事多の歩米を定て付通上利稼ニ三斤文政七申より始て牛馬

狗之事

狗ハ家猟用ニ数多飼置也物別大なるハ小なり毛色数多有木ニて上中下尾を見て狩人ハ犬を十匹り飼一年の賄米一ケ谷の米を得木也俄て腹減り骨出十匹の二匹死す事あり木ニ小村の飼犬を盗み食ふて露命を繋く依て年ニ実を食す犬ハ小豆飯を炊制ニ拵て人命を繋く之外米の死す事犬の毒に当るもの不腹脹れを治に味て食はするもの有呼声ワエ〳〵と云へハ忽来て喰犬を巣作ニ干犬を飼ふ時ハ巣を設ケ処外犬来ハ怨をなし（かくす）我等ハ雪隠ニ用ゆる木ハ大抵迚来て待合用申揚ハ大入て干巣を争ふ声動く止まず

嫌（ども）御案（ごあん）じ被（なさ）下（くだ）まじく候（そうろう）。
扨（さて）又（また）猫（ねこ）の事（こと）を申（もう）し上（あげ）候（そうろう）。
猫（ねこ）の事（こと）
猫（ねこ）のことをマヤと呼（よ）キジ毛（げ）所（ところ）色多（いろおお）シ。ヤス毛（け）稀（まれ）ニ三毛（みけ）有（あり）。毛黒（けくろ）ニて生（うま）せず。並（なみ）は大（おお）ニ勝（すぐ）れて丈（たけ）高（たか）く。ハブとあつる事（こと）専（もっぱら）。尾（お）の大（おお）なる人（ひと）を害（がい）す。鼠（ねずみ）を能（よく）捕（とら）ず。ハブ屋（や）へ入（いら）ず。依（よっ）て猫（ねこ）を飼（かい）て鼠（ねずみ）をのぞく。米（こめ）別（わけ）て化（ばけ）あけれども猫（ねこ）は三年（さんねん）ニて一（ひと）つ宛（ずつ）ニ成（なり）。雌（めす）ニ雄（おす）ニ子（こ）を産（うむ）事（こと）。すくなく。雄（おす）ニ雌（めす）ニ子（こ）を産（うむ）事（こと）多（おお）し。雄（おす）ニ雌（めす）ニ子（こ）を産（うむ）事（こと）。生（うま）せずと云（いう）。たり。一（ひと）ツ年（どし）の夏（なつ）ニ成（なり）て。屋（や）の内（うち）ニ住（すま）ける。屋中（やちゅう）ニ女猫（めすねこ）を飼（かい）。猫未（ねこまだ）だ子（こ）を生（うま）せず。産（うま）ざる内（うち）ニ雄猫（おすねこ）を入（いれ）。是（これ）ニ別（わか）れ。又（また）ニ一つ年（どし）有（あり）。雄猫（おすねこ）ハ成長（せいちょう）す。大（おお）キ成（なり）て山中（さんちゅう）ニ入（いり）。猫多（ねこおお）き所（ところ）ニ行（ゆき）。当（あた）て徘徊（はいかい）す。右（みぎ）通（とおり）猫（ねこ）を生（うま）ざる事（こと）。ざる事（こと）を。能（よく）知（しり）て。猫（ねこ）を飼（かい）ハ。すくなし。

鼠（ねずみ）之事（のこと）

屋舎（おくや）ハ勿論（もちろん）。田代（たしろ）畑（はたけ）山（やま）ハ深（ふか）き所（ところ）ニ至（いたる）迄（まで）。鼠（ねずみ）幾億萬（いくおくまん）の数（かず）を。知（しら）ず。白昼（はくちゅう）ニも徘徊（はいかい）して。家蔵（かぞう）を荒（あら）し。諸作（しょさく）を損（そこな）す事（こと）。影（かげ）ねもの。ごとし。田地（でんち）の苗（なえ）を。花（はな）米粒（こめつぶ）を食（くら）ふ事（こと）。又（また）二三寸（にさんすん）生（う）て。猫（ねこ）の。ごとき。仔（こ）を。産（うむ）事（こと）。そ。百日（ひゃくにち）を。経（へ）て。仔（こ）を。引（ひき）。穂（ほ）出（だ）れば。仔（こ）も。直（すぐ）に。食（くら）い。粟（あわ）も

栖て食ふ干外詰作に降ること攀て云へからすと
雖し鼠樹り多き可あり又格別降らざる年ありと云ふ
何そ鼠の食いたるを以て降ると云ふや鼠の食いたるを以
島を害あに右に云へるが如く鼠影なき詰作と降ること
を證くの術更によく作人數息の声止むかりしが
今年も枯木年を送るに五べき鼠樹ることを得たり當年山に豹和椎の
実、木あり鼠山中に入て椎の実を食ふ故に鼠少
しと云も理あり大なる乳柱を四本立て牖をやり七尺程
囲る苑あり大なる乳柱を四本立て牖をやり七尺程
上に付て茅延日にーたり柱に刻て丸竹の大ふ
るかしを木を鼠も手掛りてよく登ることを得へからう
す夫とても柱の住方りたるものこい何々登ること可り

干柱を登ることを得ざる人ありとも鼠干柱を登
る寸の手に唾を付て遂るより登り樹木を葛苗の
堂ゆるかく根り登るに人術に干支
ず魂故を惜をごん鼠越乗を盗て我巣に運
堂已たるもの多くあるとも干柱和抱て三足
そ行とも又鼠を取ん
毎友守は島の鳥民
就に鼠と呼ず鼠加那
加那こウンこやがナこを呼ふ何れ憎悪の言辞
る亦詰ては八ケ日那こりい家武
上は象歯下象腰丸尾とあれい文字即二の歯
の孔とは面白く呼たり
鼠作蔵に等をふさせやき巻に甲子条と云を

すこやか里は沈米を食作場に行てウンヤカ那こう
ンこやかさし作職ニサワリンこヨンナ駅ヒヲワドと
ゑて帰るすう鼠捕名に作職ニ降り下さるたと奉
礼とゑことすう
又春三四月の比私菜色悪しくなる歟鼠捕りある歟
の吁演下り出来迄也と号お中一戸家々に留守番
一人宛昼夜留て焼火を焼ます歟の用心を為て酒宴遊興する事也

九萬疋魚釣之事

九萬疋魚の事を大魚ヒウの魚と云一ツ八月下旬より
十月中旬迄の間勢ある奥より何億萬と云数を知らず上に浮き
出る奥ゟ多く出ぜいは沖を通れども何ぞへ行とも不知一
疋も不見得とゑ云ふ永良部島沖永良部島往古より十月迄
琉球沖永良部島往古より十月迄の間魚釣に出る舟
に西海迄て来海ゟは不来と云奇妙の魚ゟ釣に出る舟に
素舟（素舟とは一り舟ノこと）ゟ二人三人乗迄出て其ゟ
の人間タテヂとて釣ヲマを見の指に掛て舟の双方ゟ下ゟ
を掛て流し沖を漕て参る也魚の来る竹へ行掛れば直に
モタテヂの上ゟを咬ゐ放ず時掛ヲマにはたる針之上ゟ
の掛たるを人前之七ツ迄宛抛掛く釣ヲたり此掛ヲマの
釣ヲマは七ヲ寸にて口は一ツに舟の丽木に結い付置ヒウの喉

たる時毛上に厥ひなく引付て不切様に仕掛たるものなり
奥に囮す九尋有之タテヂの尋々は木綿素の太糸を豚の血にて染有之
三ツへに四本節にてよりたる尋々なり艫ドイカと伊勢ヲヒとは
よく似たり是あれは同しヲヒどもそれは不付奥なる處中にて
何ほど強く釣るとも糸切ることなし凡立て舟の梳
で釣るとなり全り浮には喰い不申かし凡立て舟の梳
るる時よく喰ふもの汐時に当りては何萬と有る魚の
一つ迚も不喰事有之とぞ
（図未詳）

イカ引之事

二月より五月迄六月七月より十月迄引様に
引ヲヒ木を魚の形に囮のごとく刻りそつがらし尻の方へ
針金を尖らし囮るなり製作す是を八尋の縄に付て

是の如指に掛て繰舟より磯辺を漕廻れば
る時忽に引付るなり右の図ヲヒ左に図す

一、四月より八月迄の間ウチでヲヒと云

ある海底に奥の付たる餌あるか
かり釣ゐを流して釣るなり能餌を見あせは迚ふに釣る
猶ありとぞ七八尋の海底に奥の付たる餌如何して知るや
と尚へば茶碗程位の右返して
にて知るやと尚へて今日か
歩ゐは迚ふに釣るなり二三日餌に迚ふたる石は弁しと云
時にたれは石は迚ふてあるとぞ迚ふ

一、四月より八月比まての間江うづチと云くる魚をとる網あり
此網は一細八人にて仕事る是は綱を懸の上へ立切り舟より
礫を投水入を追へは立切たる網江首を出すれなり網を
巻る魚も青之夫を行て手取にするなり二尺はかり
其餘りある魚取るより江うづチの種類数多あり左に記
す

一、青雑(アヲゾウ)ゝ
一、二俣(フタマタ)青
一、赤雑ゝ 黒に黒入、但ソウメン三斤計
一、績頭(アヤガマチ)亀甲青筋 一、ツヨ(ツヨウヅチの大きさ)青、右の名夫より此六行迄
一、青宇治(アヲウヂニ) 一、赤破和(アカバワ)尚黒赤
一、須無比未屋(スナルヒマヤ) 一、赤宇治
一、金鋏(キンバサミ)付 一、比未屋青
一、真佐名銭(マサナゼニ)付 一、追突(オツツキ)風
一、白目(シラメ) 一、人食(ヒトクヒ)人喰魚ともいう
宇留取(ウルドリ)長嘴をとりなせば二寸許りなりさるともいう
叢走(ムラバシリ)屋宇利 一、昼支(ヒルヘ)一能夫

一、正月二月三月比へキと云る魚を捕よて取る是は徳舟一艘
に二人無にて出る舟尚方位の網を四方に棒を結付海中に入置
はへキの魚の長三四寸なるか群り来て網の上に垂たる時引
上げて取る
一、正月二月三月比潮に魚の入へき竹を伺よてたてまり棒を四
追歩せは網にか方夫を取る是は徳舟一艘に二人無にて出る
は浮には石をつけ何にもなれ共引て悪しと取
止る
一、正月より三四月まての間コインと云て風を伺よてたてきりイ
千ウと云る木の皮を白にて搗崩し芭蕉の葉に包みこ
ウラキに受き流水に入れて突崩せは魚酔て出伺るなかる七
月比まては
一、正月より六七月まて大汐の時汐干に夜落の姫そイサリ

を焼猟舟を漕廻り魚の歩たる時ハウラにて突く

一、三月より八月以迄鰭（サワラ）と云魚を猟す最中は五月六月猟舟より二人乗にて歩つかりうる突場にあれば沖へ出つかりうる突場にあれば引廻せば鰭魚浮歩る時ハウラ漕て舟を横にし梳木を刺て奥の形に拵へたる長さ七尺計ある竿の先にヨマを付右の魚を突て舟へ猟具鰭魚突時の仕方左に図す

一、三四五月の間より崎々の漁父に待て寄来る魚をハウラにて突長二尺余の魚を突て沖へ破を入て懐猟す是は舟数猟舟より二人乗三人乗にて仲間あり五月末春三ヶ日を式事ヌ一とす

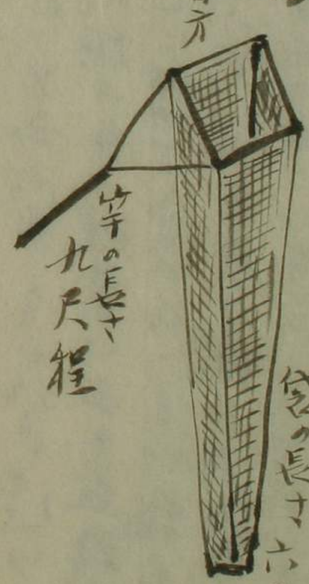
一、猟舟より十日ほど前出るを流れと云夜出るを狩流れと云霧明ケ方に出るを夜流れは止る海上例に違ひ荒き故なり

一、鮪取年分より猟舟に一人乗て漁に出て図のごとく綸に拵て差あしハウラにて突ヌ干潮まで後歩歩来る時拾ひ取る事あり鮪取の器具左に記す

一、キビナゴ魚のことをソレンと云六月より七八月迄ソレンを取ヌ、網舟二艘是に十人炬の舟一艘是に三人魚積舟一艘是に二人乗四て出炬舟先に漕て奥の付たる時網舟に若ハ漕寄て猟舟両艘の間を通て沖へ引廻せば魚ソレンの群ヒヨウホウと寄たる時は奥寄ヨウホウと寄たる時は炬舟より網舟へ行網舟より猟舟へ行網ヲ引たる時は奥寄ヨウホウに奥寄るより先中又右に云一ヲ取るより魚猟の図左に図す

一、ソレンの取やう外にそつあり四五月の仕方

以上月の頃上に上る大で 漁舟より二人乗にて出 一人は舟の
表に松明を焚けはソレ火に付て舟の下を日廻りに廻る
此艫の方に老人居て網のせき袋を差入れ又内へ息り
廻り入る大り手付舟の内へ汲い込り是は知名村の
毎年此仕掛にて取る



一、ボうと呼 師走正月に漁に演に近る寄星を拾て煮て
食ふ
一、エギりと云る猿あり
一、赤鼻片ギス猿のる、白鯛のる、夜光貝黒貝石の

居室倉庫廣屋敷構之事

島中の者共銘々細工迄貝をおもて大工の心あて屋敷
を造営するには互に加勢し造立するなり余程入念の屋舎
ふうては大工を雇ふことよくして湯むことなり加勢の者は両度
賄て細工湯を毎晩焼酎を呑することなり此時の炊方
黒椀に盛り立皿も付し翻ることなく次事なり是を皆黒椀
に盛立次たる飯五六盃より下は食ふ人なーとゝ飯は大バうに入
れ汁は摺鉢に入れて出すなり飯は一人前五合宛に焚く由
なり島中の屋敷皆瓦屋なし 勿て茅屋にて役館
代官仮屋迄小草葺耳にて玄関の軒端迄僅に瓦にて
葺けり西向ゟ篠川お茶実人土蔵を瓦にて葺たり由
是と人家丸のみかくごせり家は何れし茅の苫葺ト
けにてあれは一家根ゟは格別廣き家を造ること出来

土れを四六つも家を同丈に造て平向は植を揃て西露
を遠く客座を表とし次に内後物置杯あり下人
を四面処を定倉と云茅葺も茅葺と異り
て根をぬに甘耳て上を切ることをう平低にて見苦は
ず多くねどし数年を保つべし杯を以て葺たらば三年も保つ雑
計は保つとをり吾蔭の者かくしたらば三年も保つ雑
かゝん茅の根をぬに入て葺訳あるべし吾蔭の雑杯たち
長き茅にて根をぬに入れて葺たらば根の才大き放大凡に
杯ることをく葺先の方は実入多くことをく劣更純
く保つまるべし又根をぬに葺込ん付茅の生したる元に
て吸あるべし
又笹造も有見は格別保ちよく四五十年も保つ田大和漢

國直お美座廣と云へるも四十年の前に新宅を調へて平向
造たる侭を全く手入もよく木鉦葺して吾之を見るに
僅迄に社杯見へす是より先何十年を保つへしとし計り
紙一枚に在外を宝永の頃実入よく一入久しく保とつへりは都崎
都崎とつくる処の笹実入よく一入久しく保とつへりは都崎
踯躅の名所仁の色他に異れり葺ル茅の次茅葉の表を
たゝ浅心保を宣しきとをり材木は一つ葉イぢり松杜赤
杯タブを用中杯はタブ赤杯より何し堅木にて釘立ち
能く又抜け易し依て吾蔭の釘より丈夫に調ふへく吾蔭の釘
は十本に土本は用をまさす戸杯杯は同るへく吾蔭の杯
杯を用中るなり屋作はも向々の処柿にして柱は三尺
向の通る

庭外手水鉢竹に差屋と呼て茅屋あり 馳夫馬番
茅を囲ふ父より約て三尺向に柱を立て柱に横貫木
四つ或い三つ通す入口三尺明りあり両明とも引戸明にて
柱壁等なし又屋根は茅屋ふれそ吾藩の板葺
に異ならざるも稀にあり 馬屋 馬屋作りに異あります
居宅馬場通り辺までは苔垣あり針木の生垣あり穴石
の石垣も稀にあり いんろ石を低く切て台等立たるもあり 目見
は別して宮上より琉球人来て等と云
郷士格は勿論無人已下大抵方勤めー右まで玄外役格等
きものの如きものそ向ふは屋根内にして上には定紋如きもの
などー刻み貫脇に彫物あるなどー下には大門の外に唐りも明て

在外立派なる事なり
大島の雪隠本先に豚佐などに作りたるは望て稀なり
中に十之は及い紙ー仮屋床外之は雪隠は村々に寛の
十分一ある所紙き好きあるべしかるお多くはなかるべー加計
呂麻地阿多知村多くは三十寛伝しあ(すおもに
雪隠は一ヶ所だにあり 予北村に行ー時雪隠は何か
と尚上にスーとある村より十向斗離れて大便をなす処あり
ます行きーに流迄に榕樹の大木有て村中の男めこらに参
りて大便を通すとて勤旬の大便を三所に山のぬく持立て
置其外粉々たり夫を見るや否や手所に用るすべきは皆
きて二目と見難く恐き悪臭の為に息を記す
の木に参りて漸く用るや否や陽めたり矣草の為に息を記す
雪隠は何ます女先と別に造りて三之は上下の向に横貫

木二尺先通之行灯ヲ燈ス（盞落の底凡四五寸ヲ明ク）
烏相比は十便の叫声心祀ーたり金玉を抱て陽物を尻の
方へ押つけて小便を通せーこと数月甚だ難儀の様へ
リーが或日人の行ー後矢ヲそし地の窃候、解たり小便は
下の穴にかまいなく路板に仕掛て流すことなり和は
きたなくりあれぞ時候候ありでは中々難儀ある
右通穴を細く明る訳はお犬に糞を食せ向ふのことよう
恐りーことなるべし犬の糞を食味すること外に記せり

○新に舎宅を作りて屋根を葺ー夜お中の吉思に当
燒耐を特寄て祝いあり翌くーて庭において女に太鼓を打た
せて八月の踊のめき踊あり子対直子主の思意にて踊の
二オとも〜家の新待とはなげを歩ー路れど乱めは二才共
皆に水を入れて踊の人数へ水を灌き廻る井ハナヒをナヲス
とて種下し荒分米差し九月九日を迎の序にて先
中つ寿娘子供の支度し面体を隠し或は面体を庆岩戻
にて塗り男子は女子の形を作り女子は男子の形まど作
りて様々と媚廻ること大抵岡のめー屋根の葺替たる時し
せー時迄八十ゲを歩すにあらず屋根の葺替たる時し
亭主の思慮に依てはハナヒを歩すことありと云右祝の即
日祝祓或は平日越意の黒塗椀に飯を盛立て先膳
ることなり
屋葺請をするには右に云つるあく踊をすることあれど
米の他事ともき時新椀
比稲を振収て八九月比
請をするなり或毎作り
百姓互に隣をうかいて歌て普
六七月
六ーヲこしなり依て六
何よ字ら〜人を形むことは

白米のあるに対し八九月以外に白米を食うあるに対し
木で叩くに対し臼で舂くに対し籾みて食うに対し
招立すに要する手数多し米豊饒の時
は年々必ず籾石作るあすに於て無請
こと雖ども家普請すること毎日吉日地搪を作る日吉日を調ふる事
あり棟を上げたら屋根を葺く矢を備るの事吾儕の
如くなり

高菰

高菰と云ふは一丈五尺を一束とし一束を四本丸木
にて四方に於り一尺余の処に大夫の要あり見て勉体を
棟大凡六、七尺に積むことありとも倒ることなし火災あと

六、七下の要木亦已而て倒を待て引倒すに手あく倒すなり
引叩あー廻りするうちに倒すなり七八尺程
の処へ床を付四方とも四尺余に切て四本丸木
あきやうに並べ軒端より柱の方へ渡すれも
改修すと云ことなし軒端より柱の方へ渡すれも
虫付或は腐ると云ことなし東瓜カボチヤの実を形造
て乾く住つ丸小豆類の実虫付主て落し大なる丸柱
を低く刻りて如何ほど多くても屋木なる故手数よく
鼠は来る立を隠す柱なく外廻りの柱ほ鼠登ること
あり高菰の大きこと一束には柱九つ立も可し形は四角なる事
なり義に又寺院の二階を新に普請する時
鳥々カフカと火る日を七つ今て作りし菰は假令
鼠等は有とも入ることあるとも五穀等食ふことあ

却て葬のみ一ヶ所にて干ぬにすること折々有り奇怪なが
ら折々死せるを記録とす（一カツカを七つ合せたるは
余りに強くて人も牛馬も葬り落つるなり）カツカを七つ合するとは
あら板を五つ位合せて釘と云カツカ材木を山より出す一両日
材木の山を入初る日カツカ屋根を葺く日カツカ棟
カツカ葺請を取付カツカ葺請する日カツカ寄り伝所寄合請する日
卯一ヶカツカを鳴らすことを定りとする日雨も祝す

カツカの日取

正月丙丁　三月己酉　四月己酉
四月己酉　七月甲乙　八月甲乙
九月庚辛　十月庚辛　十二月丙丁

牛馬の柱山より御すに通例の材木八人又は九人を杭木一本を持
つ小板あるは六人を持ちあり

井戸之事

井戸の口を井川又釣河又チキヨとも地を堀て
丸石を以雪垂近等立たり故に砕米小麦大豆の類
同々井戸に落入る事あり又換砂等瓜に吸入ること
あるゆえ未開水あれは呑用は勿論手水鉢の水
にだにもちゆす清水は村中に掘く二三ヶ所四五ヶ所有
当たり水は里て間近に川水等村々にあり依て雨雪
ゐの水を以て供水なき村を守り近き
ことなり盆利ありしは水よきとも知れず地
清水なるは有るまじ屋木ぬり西才別て

水取ーと云

茅刈之事

茅刈は農業の暇に多く取たくはく至りなく作婦
男の共鎌の柄りみきものを茅の尺にかね刑
をはて軽くして二束持歸り或は大抵の程にて長きもの
を二三束持歸るものあり或は生木の棒の程にて長きものを
数十束持てるものあり女は蜀呼テルとくる手巾に茅
を入れて持歸るあり或は柏葉を一丈廻り計紙く結いて脊に
負て女持是は男の持てるよりも多く家々多くは柏葉を取り林木を
故に生木を契くことなく往来に多しとくふ（け）
依てよく知ける事他処なり

山谷山川坂路之事

湯治嶽鳥帽子嶽妻奥山嶽鳥甲三つの高山と云、その
湯治岳嶽鳥帽子嶽妻奥山嶽鳥甲三つの高山と云、その
麓に仕三つに別れて諸木もりなく
至て低くこれ也嶺石有て
ここを止まらず四方に
黒色をよりて石也
の際よき所四方を眺望
人よりすり九ヶ所あるべし鳥帽子妻奥の西岳は
行て見ーに湯治嶽より
にて西岳より第六の
あけんぞも鳥帽子岳
ある処へ掛くそうして
もりつづく峰ヶ竹

知久村の奥鳥帽子嶽小笠毋の奥高山依て島中峯と称
千と云迄を総る名なるべし（すべて深山なれば谷々川々の水の多少を以て
並なれば何れに行くべしと云ふ事なし）
採て可帰ることもまゝあり
ともあり谷々は勿論川ある往還近き村々は勿論
道を廻る中にも名ある大無村より新郷より阿本村へ
廻る坂を称して勝坂と云ふ
西竹渕名主石口村より古見より大仲市野瀬村より古見より大仲市野瀬村へ廻る坂古見より大仲市野瀬村より
野瀬村より須坂の金久村へ廻る坂須坂の金久村より須坂の東仲町へ
より住用の西仲町へ廻る坂住用役所村より東方勝之
浦村へ廻る坂住用山より東方勝往村より越る坂

勝往村より勝之浦村へ廻る坂を称して大湯峯と云ふ
大湯峯より釜村へ廻る坂を大和渡と云ふ
戸田村へ廻る坂戸田村より大和渡を
大和渡より今里村へ廻る坂を大和渡と称す
村へ廻る坂を大和渡と称す
へ廻る坂各別て有ども
は思ふへ（すべて山は東西十里餘南北五六里二三里づゝ
しかるへし）廻て大木立茂れるを云ふ
き材はあるへし（すべて住用西川
流れ出里に及ぶ島中第一の大川なり）
上西の滝也云て壹名山中組頭名れは
苦人足を引ことなり（すべて次古見の川太しすべて此
程の川ふ

船場　大船掛り砂利徒人渡也

笠利間切　法城湾　龍御　阿多奴崎　浦　名瀬

大熊　大和濱　宇検　名柄　西間切　深浦

東間切　池間　宇検　東手久　住用　武　知名

古見　當方ヨリ住用湾ヨリ掛ル

右の湾に大船の入湾あり依之舟船場と云本琉球

にて下ろす荷に汐揚り宜津を下り陸上り湾と云西間

切花天宇検の名柄西古見等より院球下り手

宝の豆

船舟　（川船）

イタウ名ノ

捺公舟　二百七八十艘　文政五午年改二百六十艘　三枚帆　七八艘　同年改八艘

獨木舟　二百五艘　同年改二百五艘

本田張九郎代官之節文化元年に改之処の船数の上四下小書

の通り船数年々増減有不同

實德佐和雄唐噺

一、メイヨウ一名メエラとも云獣あり形野牛に似て野牛より身な

り丸く長みあり毛大白にして深し角の有無不覚なり木の葉草を

食すと云へり

一、水牛数多飼へり面は牛に異ならずと雖も長みあり形ち丸肴

の如く薄くして高さ一間にも及ぶべし長さ七尺位毛色黒に少黒み

あり角は両角にして灌子のつるの如し角の廻一尺二三寸位長二

尺七八寸位あるべし角あれども人を突く事を知らず至って仁獣

なり田地をすかせ砂糖車を引かせ諸作する力を盛す車重實

て角と鼻のみ出して體を冷す又諸作の時水牛を引き出すに夫を

仕ふ者其の牛に乗って出童子水牛に乗り鼻より綱を付けて

引き廻るなり途中草など食はするに諸作に障れば綱を引
又行牧童の牛に乗る繩を見る事あり此水牛に乗りたる圖なる
べしと語し宣哉

一、驢馬に人の乗り行くを見たり程日本の馬より小振二才馬の大ぶり程
あり耳長く尾は牛に似て足は馬に異らずと圖も爪は牛の如し毛色水
青にて靜なる体の者なり力強しといへり

一、鳥多し水辺に住むと圖を水鳥にてなし大抵鳩の程ありて鳥
に似たりキヤアくくと鳴くと云ふ

一、家鴨を川の辺に飼ふ事夥し一家に二三百つゝ飼ひて賣る者
あり夜明くれば屋敷よりイラサ竹にて追出すなり暮れに又帰
りて宿す

一、豚を三四十疋宛飼置て賣る者あり飼用の次第家は一つに三四

十疋入置きて飼ふなり豚を飼ふもの家毎に廻りて洗濯を銭を出し
求めて食はすなり

一、立落地生を夥しく植るなり砂地の所は惣て立落地生當といへり熟して
實を取る時は二尺方許りの圖の如き土ふるいにて落地生を振
ひ出すなり砂地故実はふるいに残りて取る事忽なり落地生油
をしめて油あけに用ゆれども先第一は其油燈用に用ひ食物過半
は油あげにすることなれども是は豚の油なり亦豆腐多し是皆落
地生にて作る色白きなり外の豆腐食したる事なしと云へり落地生
を菓子にする事あり此は白き粉に白砂糖を交へ水にてよく加減
して合せ落地生を煎て皮を去りて其倍右の合せ粉に交へ絞にして鍋
に油を引きて焼菓子にするなり勝れたるものと云へり彼の白き粉と
は麦ならんと云へり菓子は多きなり右の如く粉と白

砂糖を交ぜ外に胡麻を付けて油焼の菓子あり

一、町の造り日本に替る事なし都て二階造にして下は石置中に食堂あり食堂形長きもあり丸きもあり四角もあり様々なり脇には倚子家毎に異なり寝る時はバンコありて夫に伏す二階は人体に應し間数銘々に分て他出の時は留守番ありと雖も自分持切の小座は錠をおろして出るなり城下田舎に至るまで悉て瓦屋なり家の戸口は一間も三尺もありすべて廻戸なり

一、客人有之節は亭子倚子より一間ばかり進み出行き膝をつき圖の如く手を合せて禮式すれば客又進み来りて亭主の手を抱へ上ゲ客退けば亭主又以前のごとく三度まで同様に拜するなり夫より主客共に倚子に腰を掛ければ茶を出す貴人へは茶碗（日本の大なる茶碗なり）茶を真人にて蓋を覆出すなり茶真人にて蓋を覆出すある故蓋を覆なから吞む事なり　煙草火は油火を　墨の真中に出せば長三尺餘の煙管を以て主客共に夫より呑む燒酎はビンを一つ出して主客銘々に猪口を以て次廻し呑むなり初の客人なりとも更に呑めくと進むる事なし取肴はシッポク墨に様々ありて一度亭主より小皿に次き出せは後に銘々好の物を手次にする

一、初恵引存廣東省陸豊縣之内碣石鎮（津口を鎮と云ふと覚えたり）（此所押へ大将ハ賊起りし守陳に赴き留守と聞）尚夜前として三日同縣へ送られ夜入五ツ時分着す行程日本里数にして六里計日本人は城外に扣させ置き官領人は城内へ入り二時計りにして城門を開き門内の双方へ改役人七八人立候ので日本人一人々々改めて通したり双物にても所持してはなりかとの体に見えたり城屋に入り

りて銘々倚子あり夫れに腰を掛け後出でて七時頃
と筆談あり終りて夜の食事分町屋へ帰り届けられたれば呉屬に
役人来り居湯などわかしあり銘々手水を仕舞ひて粥出暁方亦
城より役人来りて筆談あり左あって翌々日日本人悉く城に出筆談
一通りありて町屋へ城より帰りしに菓子等贈り賜る彼所廿四日程
滞在いたし一見畸すなに余程繁華の所なり何方も香の焼通
しにして薫香の絶ゆる事なし一日寺に参りしに大概六七才頃より
長さ五尺計の官香を燻にて焼き有之此所龍王堂とて石計
一、乗馬は陽傘のキレを取りてあるなり又鼻の両脇切さてある
り馬の吁息のよくもるべき為なりと
一、唐羊大根余り大を見ず悉赤土なし汚かと云

一、北京の事をホクキヤンと云ふ
一、廣東省にて異國船を数隻見たり アンナン西洋 阿蘭陀 廣東省
は日本大坂の如く賣船の集り処といへり此所異国人は上陸の儀六ヶ
敷依て日本人も船住居したりと云ふ
一、廣東人参は廣東の地に生せし者にはなく異国より来りて廣東まて
賣廣ある故廣東人参と云と廣東まて聞きしと噺せり
一、唐國は今大清国なれども前世明國の遺風ありて清國の下賤は皆今
に大明國と呼ぶとなり
一、古鏡にて事欲何か手に握りて食ふ何かと聞きて見しに蚤の
繭の中を掛けたる中の虫を煎りて食ふ由噺したりと云ふ
一、水は何方にも皆濁水なるか清水の用あれば桶に水を吸み込て明盤

を入れて榛を交へて暫く置けば清水となる

一、左浦に四ヶ所滞在せしが巡見の由にて供人三十人計列たる官人道樂を追て通行あり是にかゝらず貴人官婚葬祭は毎も通常なり

一、シッポク菓の高大抵　七ツ通りにあり

一、大清國味噌なし上品の人は煮て醤油と見得たり下々には塩ばかりにて萬事油あげもの多し飯も冷飯になれば甚まづく食する事なく鍋に油を引て暖めて食す油は多き所なり

一、牛の油も第一油あげものにもすれども船の碇其外船具に付けるとみへたり

一、忌中には皆將衣束なり忌中の処は何方も白地木綿掛てありと云

一、婚禮は白尺にて嫁は親の許を出て道樂にて行けば誰れも途中に行逢ひし人々は嫁の入りし轎の簾を上げて嫁を一目つゝ見るなり外の行列に其のめく障る事なし

一、男は髪の四方をそり廻し中を三つに分け組み垂れて留りを黒糸を以てとゞざる様にしてあるなり面体は琉球人のめく上に下にヒケあるなり

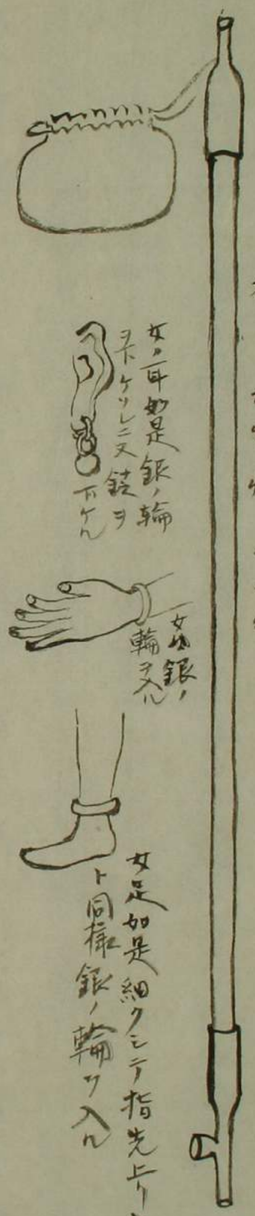
一、女は惣髪にて少し鬢を出し髪を中に高く結ひ上げ簪を数多指したりと雖も日本の簪に異る事なく頭は耳かきのめくして本の方偏にし花ある様々ありて一二寸玉抔下りたり

一、女は耳の下に銀の輪を入れて夫れに少しき鍋を下げて往来におらく鳴る足は幼稚の時指先の方を摺分て親指計りを上に出し外四つの指は下に曲て少しく足の服も甚短く往来危く見えたり下賤の女は右のめく足袋を脱付て細くなり事なし

一、女の衣服下ハ一つ内を着其の上に袴のめくしたる者を着し上ハ

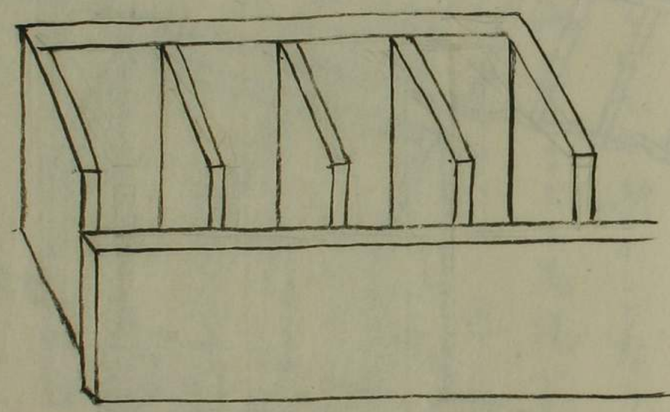
テンのめす物を牡丹かけにて着し袖は五六寸垂れたる袖なり

一年老いたる女は大方圖のごとく煙草箱を枝にして煙草入を持添へて往来するなり

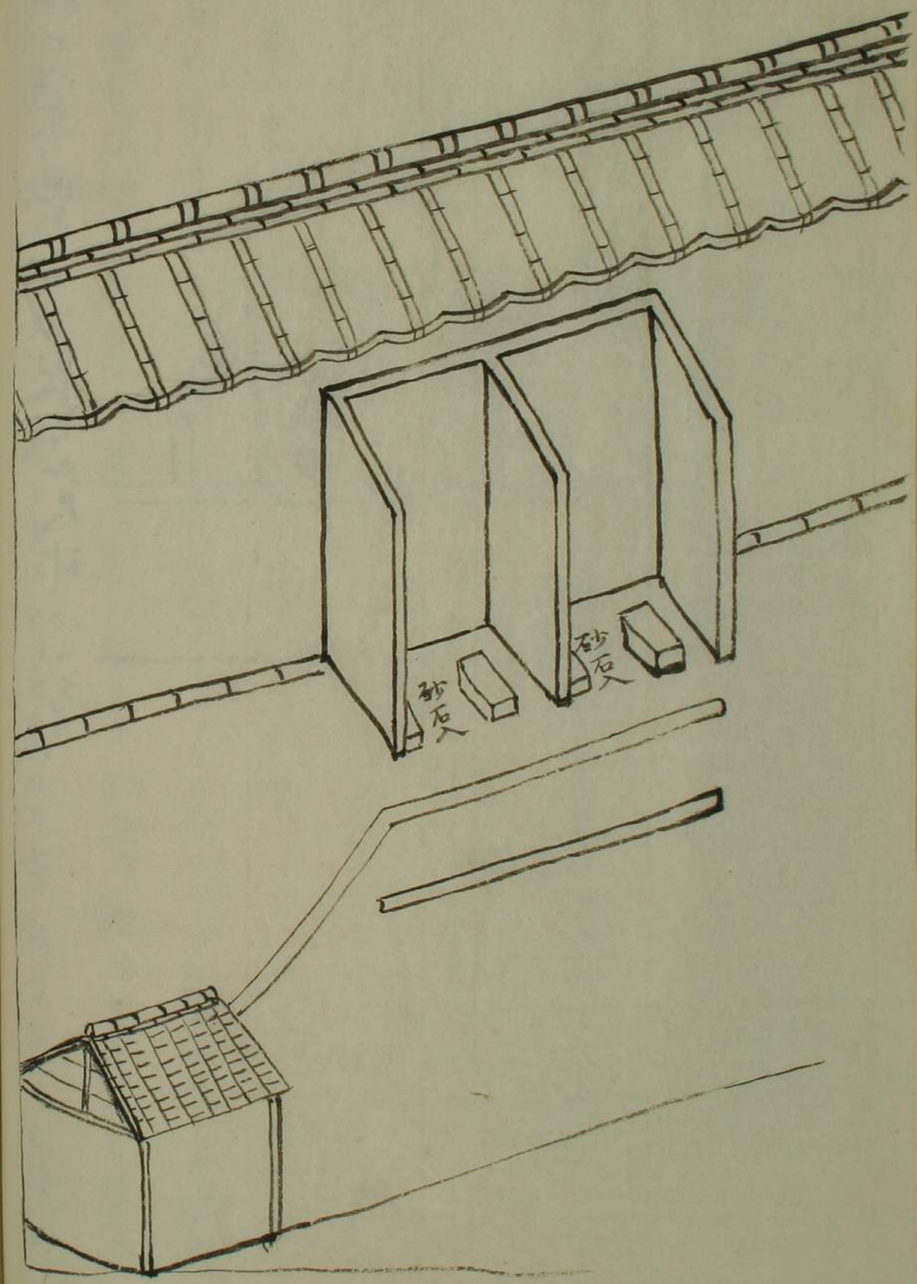


一水晶の玉をつなきたる燈灯を見たりと云ふ

一山芋の見事なる物市店ありに数多あるを見て目を驚かせしが或時所々田舎の畑を見るに山芋を掘て植たる処あり故を尋て高く築きあげて高き処に植えて一本ごとに手を呉たり市店にて見る山芋の程七八寸廻りにして長さ三尺許つゝあり



一、常山驛にて年二十才ばかりにて長ケ八尺計の人に行逢のし事あり
珍らしき人にてありけると噺せしとなり
一、唐は城下は勿論在々まで馬場節は迅にして双方溝これあり馬場節
石堅めにしてありある所あく能く手の届きたるものなりと云へり
一、盲目の男女三味線を引き門を数へて貰ひをするを見たり
一、物賣の声日本に異らず引なかめて哥のやし 柵賣の声へ アデエーアゲ
枇杷賣の聲へユービイーホウー ロウサゲンウー
一、密柑を求めしに皮共に求あれば一つに二文つゝ皮を返せば一文に二つゝ
にて三れありたりとなり 廣東者ようの佐浦へ送らる時川警せしに三日
三夜密柑山を通りし事ありと云ふ
一、上品の女どもは夜入れば戸外に出ず大小便も家内にて通ずる
と見えたり 石仕の朝毎に川に出て圊のおけ糞桶を洗ふ事を



見たり桶は鉄の帯を入れ蓋ありて漆塗なり

一、陸豊縣より廣東省へ送らるゝ時日本人皆轎と云物に乗せたり擔ぐ人員共大儀の事と見えけれども日本人を拿獲の官人先に行はれて見えけるゆゑ能く擔ぐしかも速かに先に見えたやうになりて此所は轎より下りて歩行の処となり日本人を轎より下して歩行致させたり是を寧鎮人の従者見て然るべからず日本人亦早く轎に乗せて行けと云ひければ人員の者後はお爭って官人往者人足を捕へて行かんとすれども行かず良ありて官人ら引返られ叱られければ

其命に従って又々日本人を擔ぎて行きたり定りたる旅宿へ着きて不埒の人足を引出し丸裸にして石攻に拝伏させて官人何ぐと云ひつゝ、罰れば不官と見へし者別行を吹て二三十棒打ち暫くして又官人来り何ぐと云ひつゝと制めれば別行を吹て二三十づゝ打たする事度にして後追の放ちたり轎の図左に出す

一、罪人の首に三尺方計りの板をあてゝ日数満ちされども世間へ用事あれば徘徊する事苦しからず首に板を入れなから徘徊する者を度々見たりと云ふ

一、唐國は何方も兵荼毒の鳴通しなり音信物など貴のし時唯今音物の届きたると云相図の礼式の礼と見へて鳴す其外先祖祭

一、所々にて飾付の武具を見るに至つて簾抹なるものなり鎗杯も

竹の梢にて穂は鞘もなく秋身のみ至極錆入てゐとんちやくのものなり

一、南旌縣より東南安縣へ出る中途梅嶺と云梅山を一里餘通りしなり

一、一里餘の川に舟橋あり中に鉄鎖を張りて天れに舟を伺千艘も繋付けを後渡りにしたるあり中に又大き船あり是は官人結て関所と見えたりと云舟橋なれば外に通るべき所なく関所は両服にありて然るの者を奇妙の仕掛なり

一、手やうにて唐人嘶すれば日本國も唐國もろこを替るところに指をさし胸は同しと胸を押へて善人は善人悪人は悪人といへり

一、南の方陽石鎮の辺は茶の事をさあと云佐浦の辺は茶の事をぞうと云心なり

一、正月元旦には各時の後を家毎に戸外に引きたり極月には此縄を土器るもの俗俚しきたり

一、朝は線香一堆持庭へ出て東西南北をねて其線香を四才に立なり此事を所々にて見たりと

婚姻之事

婚姻の事を子ビキと云子ビキの次第を委しく
思ふ人の方よりとの意に決定
遣すとのこと成れは日柄面調へ祝儀のあとより
ふる祝盃一面焼酎三合持参して男に掛り障ふ事遣とのの
返礼ありて叶表向能日柄面調へ祝儀のたしかなる者ふ
重のめ一組焼酎一升樽二荷の口ふ打添て男清四柄相調へ
婚姻来る何日と相定め婚礼の当日相成嫁の方へ為迎
祝儀夫婦ふ系遣す男の方よりも迎人と云又乙女供とて
夫婦遣す三は何ど訪夫婦よりも男上下にて女はタナゴとて平日の衣
男引人より右男め何れも黒服の上より極上紋芭蕉の白衣を着し赤カヂとて白き頭巾
を冠りより右四人共ふ馬上の跡あれぞて名供二人は徒歩
其外の事のみあり外に女の供四人男の供十人斗り遣すあり
参りそれ直に嫁には不参男を取りて人をして伺い嫁の方
萬事の仕舞迄来り今来ふ夫方よりの迎物コハン二組(竹筒飯一組とは二つとを云ふ二組とは四つとを云ふ)一組は肴一つは
餅一つはカレキ(小魚の干物とは合の飯)焼酎七瓶大豚
汁平白一條すまり蓋一面焼酎二合野菜肴数過名
遣すあり嫁方より迎人て名供左の如し孟宗肴之
此時乙名供の女一人祝の歌を詠ふことあり平歌

大夫婦並ふことあり左右に送立人とて二夫婦て名供一
夫婦並又童(わらべ)送立人とて十二三歳に相成る女二人左右
嫁の方より参る何れも馬上あり女は前にし祝せ一通りすべ

を着しサビを冠るもう嫁も同様タナベを着しサビを冠るもう嫁祝の許より出立のはい送り座として門外へ畳敷く迎に来りたる前共へ焼酎を呑ますること勿論なり

中途見物人等多く嫁は恥ありて冠れるサビの垂れたる双方を口にかみて両眼のみ大方あらせることもう嫁の立退物は三合瓶一対の外引入器もう嫁は又夫の家に直には不入立箱をとりて支度皆をとを致し男姑共に来り盃取肴等これあり稍相待夫の才仕舞置ありて早や暮れとの夜を受け矣もう嫁は主石の上席床柱の脇へ下向に座すもう嫁は従日国屋にて西を隔て居平日の食物等何も衣はせずしもう故に姑の双方の童送立為て食物の為を勤もう書婦ありて主居の才童より送立人次に迎人の女坐し干次に乙客供の女

坐し干次夫干次留り坐す姑い初主石を嫁とは盃等お済い我箱そは干席の次床の前下り向に送立人は不当ともう客居童送立人の干送立人迎人双方の女両人坐し干次乙客供の女キの女ありより当床の前に寝付もう飾付有之八寸に紙を敷猪口形を盛塩有之を娘の乙客供初合五人坐相定もう玉ダス同断赤玉ダスキの女水を茶碗に次に夫のキへ出す嫁一口呑嫁の呑掛を夫のキへ差出夫又一口呑夫もう三献初もう干次茶は菓子次に茶次に肴の吸物皆皆には外に野菜数四品入るなり

名之事

男女珍しき名多し

乾坤
木類
言語
魚類
農事
条
数量

雑事
獣類
寺事
鳥類
身体
刑獄
居室

飲食
海草
醫事
草類
時候
療養
寺

衣類
器財
毎中行事
竹類
葬事
人名

服制
神祇
虫類
婚儀
役儀

新納中三君ノ依頼ニ依テ明治十九年六月ヨリ今二十二年六月ニ至ル
足掛四年ノ間鹿児島県下薩摩国泉崎村農事験場ニ於テ
木腸啓四郎 祐業

南島雜話 附錄

大島詰見習役被仰付罷下候節御薬園に被掛置
候次第且上帆之上御用品差上候旨被仰渡之通

文政十年子八月二十三日大島詰横目被仰付翌丑春薬船ニ差掛
黄刈奉之助殿より坂元平右衛門御取次を以て詰中御薬園才へ
被掛置候向草木砂石魚鳥等に至る迄心掛探採才鑑定之上寄
届異草之数は則早船を以差登候様可取計御書附を以て被仰
渡旨又委細之儀は御薬園奉行勤柑田伊左エ門より可相達旨
承知仕罷帰同二月廿四日前之廉を以薬船出
帆迄被仰渡候に付同三月初旬出帆之運大島に八里計
代 傳見村小竹迄風を南之方被吹流候へ共船底浅く外相扶ける右
處に船壱艘下り牛庄船狭く外相扶ける右
船を頼て同四月十五日大島東向坂伊須湊へ致着當
日より殿中書記を當依被仰渡候書面之通不相分何之御事故

候てより色々取扱等今日
其侭自分方へ参りをり
致通勤所的数三拾六日取集寛永廿壱年大熊氏儀
にて候処私と肩を並て従
仕方朝鮮國渡天之儀一件着いたし候事三十六ヶ年を持ち
別帳書之上差上申候事ニ候得共右之内ニ
出候拙絵元手ニ而ニ候ハヽ
拙共有之ハ指出候様仕度
書改可差上候て御断申上候得共又々向井十郎左衛門
同人をもつて
申ニ付
平候ニ而不苦ハヽ
今差出ハヽ拙寛永廿壱年ニ
跡ニ而ニ候ハヽ
差上候様ニ
御覧之上
返被下候ハヽ
拙宅へ
御届可被下候
以上

一反お預申候絵画の
お下ケ拙向井十郎左衛門
より奉書を請取候段自筆
相違無之候
天保十三　卯　三月朔日

一、真珠大小十五
一、紫色硯石
一、こしや
一、沈菊紋石
一、魚脳石
一、七名草
一、松楠木
一、山龍眼
一、東向貝
以上三拾六品 海中ニ於ル品あまたあり勝てふ記又石神在銘
十月鉄炮まん条衣し数は返一被下

一、牛王大小
一、琥珀石
一、浮菊紋石
一、藤
一、鳥床
一、寄南木
一、なんかい
一、大島ろん陳
一、ミー豆
一、夜光貝玉
一、鳥木生木
一、化石
一、蛇ノ玉
一、沈香木
一、香料
一、濱いう
一、真阿珂玉里 大島ろせい
一、箱骨葉花 山珠
一、下り花
一、椰子大小
一、百足珠一

一、此南島雑記ハ琉球並諸島ニ事ヲ筆記為申候
然ニ人ニ一切為ニ候事ニ候ハ依人備用ニ候事
一、大島往申ニ四季ニ一度ツヽ四度廻島いたし鳴申ニ候
廻り数探採方候
一、異氏共之申付ニ候ハ得ニ候ハ又ハ共申付候歟
依ニ候記載ニ候ハ又ハ共申付候歟
表書載ニ候ハ天狗逃霊ニ候ハ一写ニ候ハ
ニ候ハ書写候ハ不ニ候ハ見ル人ニ心得ニ候ハ
一、草木ニ候ハ土地ニ生ニ候ハ又外ニ移シ植テ今ニ候ハ
草木ノ形同シ葉ノ形同シ葉ノ形ニ候ハ
ニ候ハ違ヒ人ニ候ハ

一、平家落人田地割等の義は書留日記に申す書記文
面にも本三通御墨付
一、嶋島等三候格莚帳代官ヘ被仰渡候面を本より
いつ一平ヶ所まで参会御い得ど左程遠の候ゝ冬之義と
相考え徒ヶ島喜界島等は除て不申記大島より
方位迄をあ記

嶋嘉

琉球唐画図中山伊信録曰琉球属邑三十六島一也
島名世麻伊信録曰在度枯東西去中山八百里水行三日可達
其島八百里即清朝六十一里強
北朔朝永楽年中呼北山曰本應永之比當大嶋を指す尚巴志
三世明の永楽二十一年大祖に奏して南山先島北山嶋名世麻一統
南嶋大島その外奥島中の廣島徳之島等を指て云か
佳寄吾麻西向如集向融島まで
編日本紀曰文武帝三年秋七月多褹屋久島度感等
人来朝入貢の事見得たり伊信録抔を度感等之麻
とゝ由吾何の比まで改めて無跡と書事ゝ詳伊信録には
由吾島奇奴何の比まで請と書事不詳伊信録島奇奴
流虬今琉球隋書流求元書瑠求明書供卸中琉球之称

知李古書琉球ハもくてう上に縄をたへたる貌ヲ似たれハ
礼表李波のゑと名く礼知李ハヲキナハの略傳書
龍宮 南山北山中山の総名
宇留麻 傳書
三島大島喜界島徳之島永良部島等
喜界島属大島の島ゝ総名 長九年まては
島大島の属奥まてと云
道島 琉球ヲ云道の島ゝ大島徳の島喜界島等
の総名今に至て大島代官より依て差引する中ニ
名人島西の粗無路島請島南曽笠利ヲ
の北に島有梅雨天晴海上晴ニ遠に在ニの方に当て島の形
見ること可ヲ平島を見る人なし 就中笠利ヲ
ゟ見ゑるの多し 平島形状同じ

佳奇呂麻 周十五里
海ゟの向九ヲ三十六丁一里にて六七里
請 周ヲ四里九丁 属西ヲ
婆母を盗み出荒波に
死するもの多し
共路 周ヲ三里二十丁 本島の未申の方に有ヲ
三十六丁一里 平ら海岸山坂嶮岨大概ニ縄をゐて究むる
丁数ゟ依て ト詳事多し五十丁を以て為一里六十丁為
一里 近ゟ同ゟ
喜次如葛 島人神明と云 故に山畑開て島
伊佐戸波奈礼 宇検の為ニ
自今承り作把入礼ヲ時 伊佐戸島ト書出ル
阿完と申 村名
極々ゟ上地面ゟと云
屋喜井屋 名前名ゟ伊津部
多古戸到 勇山岩島
佳奇呂麻 周十五里
海ゟの向九ヲ三十六丁一里にて六七里
請 周ヲ四里九丁 属西ヲ
婆母を盗み出荒波に
死するもの多し
共路 周ヲ三里二十丁 清無路の号海上二十丁と名ル
三十六丁一里 平ら海岸山坂嶮岨大概ニ縄をゐて究むる
丁数ゟ依て ト詳事多し五十丁を以て為一里六十丁為
一里 近ゟ同ゟ 伊仏人今未西迄ニ彼南ニ畑地とす
喜次如葛 島人神明ゟと云 故に山畑開て島人多ゟ
伊佐戸波奈礼 宇検の為ニ 自今承り作把入礼ヲ時 伊佐戸島ト書出ル
阿完と申 村名
極々ゟ上地面ゟと云
屋喜井屋 名前名ゟ伊津部
多古戸到 勇山岩島 周ヲ三ヲ 伊津部ゟ大熊井ゟ南ニ当ル山半ヲ牧スル
三十丁 見外盛ニ当ル
伊津部勝美里計ヲ為ル 此島廻ヲ

三千余まで此の島に住む多古戸別と云
吉男地　は島に柑橘多く又鳥兎牝牡共に
表男地は表男島の東地流来て住用の伊地の神を崇
来る　　云伝し　　放よ
與世天　三を合て吉島とす又神島と云大島の西に有る矣二は
一里半許一は二里　大和濱より曜灰に至る又女院陀久喜人
常に漢方を採て来りて石住す久喜人は島より降る時は水の
ある霧を深くかくし置く若水あれど実を取るの大島
迫より多く来り石住せんを嫌い又は島には永良部鰐
矣、その外の矣甚多き故如斯と云三島の中一島は長く東の
方に離れて一島は西の方にあり中の島大にて山高く焼け間
東に立つ岩石多し神と服凡を持とまこと木にて異形
を造り船中の人数持を助ける時は島に至れば如く木にて

或つとなく造り持く與世天より東十八里宝島あり此島の
由来別に能記久米信来の手井に記す
御神島三島各名あり一名ヨカミ東方長き島ヨコアテと
云此祝不詳

地理

笠利　阿多奴崎より　　称号当島
交趾已久今見毒の衣数
以降二十四文六合見程於一
大島は三きの町土里にて周囲五十九里
東に流三十一里二十四丁中山伊信録の島の長さ一百三十里と
即六十里ち要計岩石の場を除て廻り七日半二日八里の
歟か

天象時令

富山と雖ども土石ともに多く雷声絶く雹を
急あり雨晴寒候甚偏也梅雨南才より秀冷露白
北方降入梅自後早きこと三十日凡声雨三次震裂地天災甚多
地妖五年一次四時之気候不順年荒而蝗鼠三災甚多
蝗如雲飛来虫如蝋酒歩草木皆尽
冬不見霜雪四月霰降芋葉皆凋瞬天子重衣夏不花
裘衣春日以餘食不嘲梅花稀開晩稲不収冬種夏
牧麦刈麻女村々口を拒み一村一書三夜男
女踊をなし門毎に行て踊る假屋本は代皮仆
見役時役と次第に踊る荒歳は是を禁す

地震之事

北島地震向々あり我藩の地震と偉異ると覚へ
あり依て記すなり
ばかり雨にあたり地鳴すれば
あって雷々と地震す我藩の地震
大地震之後の割たるごとあり
するに似たり

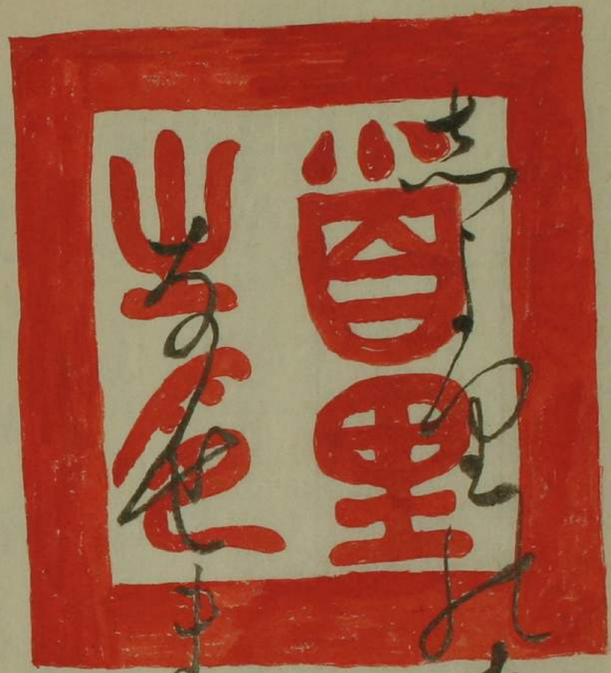
法制

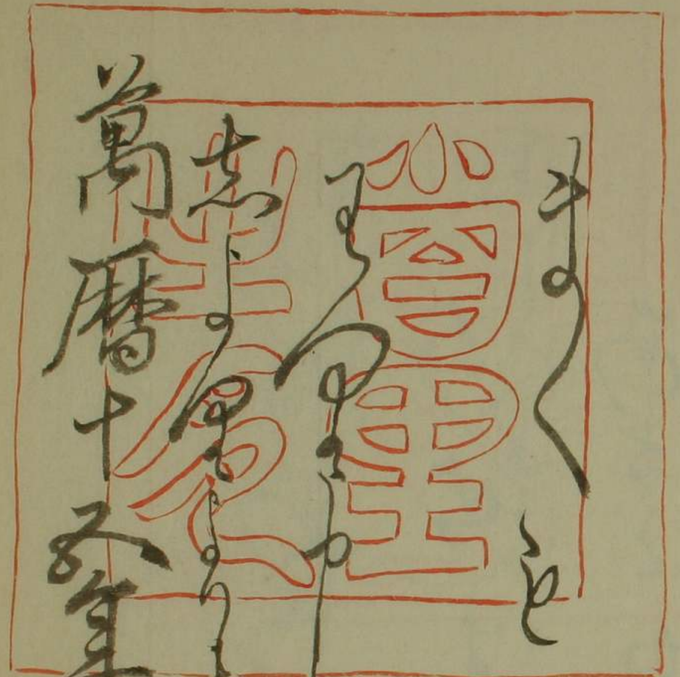
慶長六年癸丑始て按撫使を被置 奥羽両国共に被為仰付
元和十四年戊辰 奥羽両国惣中殺之両国中巡見有之 奥州仙台
勤務の旨不洋追々可記
元和八年始て奉検者壱人を被建 二ヶ年代寛永三年罷む
巡見二ヶ年掛奉行二人を被建 同三年横目共庭横目七人宛に
定る
寛政十二年庚申始置場官士人 会津高人 南山野耕田畑 同十
二年其事止
慶長十六年高人皆士氏に準ず 職事ある者は一等を上ず 傍
の下士に準ず 職事を退く者は還士氏一高の頭目を大親と
称その次を供人と云 元和九年古制を改て大紀を除き

奥人と無人と者改め無人を以て長とす即今の例格に定る
慶長十四年島人初て連役舎二十宇は本に有り
寛永十四年笠利向切来木名金久村に役屋を移す同十六年
又本の大熊に移す十有六宇を住て慶安二年来木名該金
久村に移す同四年又大熊村に移す何二十三年延宝元年移来
木名従之代官白来る一両役百家指有九年を向新に役
屋を移す事なし
村中の大なる家宅を為役屋故に役屋諸所より移る事なし代
近は代官の心次第を以て移り延宝元年移来木名役新に役
屋を移す事ハ古より住元年依吟味随分今の名流伊津部村
に役屋を移す九慶長十四年より寛文九年迄百九十三
年也
寛暦四年為断向切新役屋依に吟役屋又古き役屋

慶長十八年始て沖元仁右衛門を以て大島代官職被
仰付翌年検地を始め島人を皆土人に準し諸事取扱来ル
一等格に下士に準し大島に始て掟令を建る其次
役人とす大島に始て掟令を建る事ハ之和九年慶
長十九年也
社定同拾年二月十日時の収元掟令し帳に定置
元服賜品を本琉球より受る事ハ禁制すれ共
呂久米年々印紙を本院より願ふことを許
故に寛永十九年迄ハ毎年友印を以て今貢之四枚を
免め何ふ大熊村々ハ無村安而
寄留す百本書の郡納置書付を以大熊村
久米あの郡本書押付之
琉球の郡書之本書ハ唐何之文面如
此琉球より朱印首里より朱印と云文有

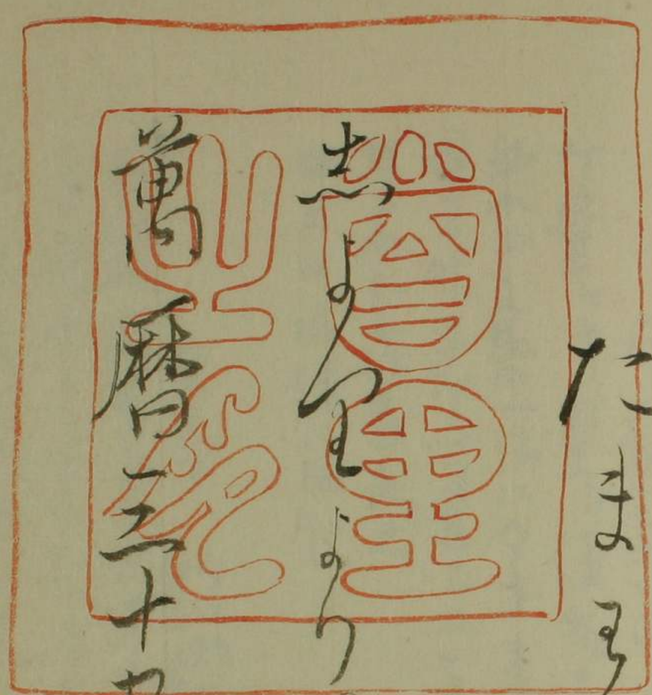
首里の里の字を用ゐると有之候、





一人も多くまいるものの方よろしかるべく候、

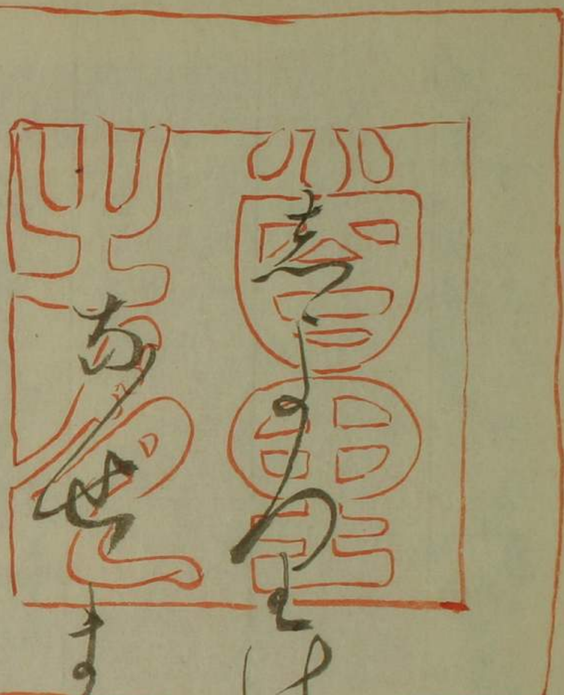
萬曆十年十月四日



たまるまで

忘れものしてうくの方へまいる

萬曆三十五年閏六月六日



あさとあさまでの

一人いる物してうくの

斤量 ケキリ量り係物を用ふ升合平皆大和當り
多木ぞり島の一法に勺まで竹筒を以て勺土合を掛へ
量る升の節一つ置て上を勺とし一下をおとし一島人加比
世土木た竹着魚之
曲尺は法係に同じ

交易

南海孤島交易を主一とすれ共通商と迄不至のみならず多くは物品のまゝをいたす

米三斤　油十六斤　髪指十三斤　塩七合弄
蠟一斤　油一升　髪指一升　紙十八斤
中一本　綿二十斤位　紅絹糸半斤　烟草十八斤
一升　上一斤

筆 三行 大豆 二行 丹物 酒 六行
傘 乾目 三寸位 白張 十二三行位 焼酎 三行
日傘 十二三行

産物

鞍 桑の木の外に曲り木を用ゐ生皮にて鞍下皮等は土佐半紙にて張る米三斗つゝ木地ノ鞍ハ米弐斗位 上品は芋を用作ゐ下品は麦稈にて張る

三紋 如く枝桐の葉を用作ゐ下品は麦稈にて張る米弐斗に替る

木鐘 切抜の牛皮 浄門院牛の一枚皮を用ゆ

芭蕉布 嶋地色々種上品の芭蕉の糸を大島より本琉球に流すことそ本院琉紅紋等模に是を芭蕉カ子琉と云 飛久あつや出て極く薄く織かすり色々あり

紬 織真いつやそれハ絹糸を用ゆ

蔴 かいこの大さゝす

山餅 ぎうひ 糯米の粉を蒸して作る 大鼓 もちまきの如く作り 灯米 糯米を炒て製す

煙草 笠利より切多く作る 焼酎 黍の実、麹の実、砂糖、水を以て製す 豆腐

雑品

着笠 竹皮、蔴を つくる 火縄 椎の木皮を焼 伝ゝ同じ

百合根 そのまゝ食ふ 鍛冶炭 椎の木皮を焼 みち炭とす 製法百合根を能洗い生のまゝ白にうすきつき

米麩 俵に高し 米を一夜水に浸し二昼夜程にして八分通す 俵の予証のとき

菓子 菓子屋より切て出す 椎葉 椎の葉を以て製す

かたくり 菓子の立ちよく外根長く穂小丈夫長し

鍋 鋳物 **釜** 鋳物

味噌 味噌 **醤油** 味噌製のもの、醤油半分位

神酒 十七八才の女子口を洗い一升に米一合麹一合位 **焼酎** 黍の実、麹の実、砂糖、水にて製す

のものにはきを入れ神酒とす 焼酎 黍を白粥に炊き麹と

はだ物来ると也 ほかろくたる 米を白粥に炊き麹と

紙 楮の木の皮を用い漉く 傘に張る 桑皮 芙蓉 洗晒木也 用分半紙

塩 塩水を似て日を経て製す 椎葉 椎の葉を

足袋 古見上品とす 外村の製す 笠利は備後表を上とす

備後 笠利 外村の製す 笠利は備後表を上とす

下下ゝ 下下ゝ 下下ゝ 下下ゝ

砂糖 黒砂糖 白砂糖 車砂糖 芭蕉 之次き 同業

等 沈砂糖 笠利 西古見 西方 西方 西方 西方

村里

名瀬方十二ヶ村　小宿　佐念　朝仁　金久
根瀬部　知名瀬　浦上　有屋　朝戸　中勝
伊津部　大熊
佐念、朝戸の両村は古子保以来借財の為め身を売る人家なし

笠利
龍郷方七ヶ村
屋仁　佐仁　用
龍郷十ヶ村
有良　喜瀬　湯湾
久場　瀬花面部　阿木名　戸口
赤木名　十一ヶ村　戸数　嘉徳　円
辺留　次野　宇宿　万屋　節田　秋野　平

赤尾木　芦徳　里　赤木名
瀬名方　六ヶ村（舌里小使村）
浦　大勝　古里　中勝　奥向　広日
古見方　七ヶ村　伊津勝　朝戸　西中勝
小漢　名瀬勝
住用方　十四ヶ村
市　山向　屋勝　田代　役勝　石原　西中向
神屋　橋勝　和瀬　金久　見里　東中向　川内
古仲まで住用方と二方切に分れしが近年屋勝、田代、神屋、橋勝四ヶ村廃村となり今合て住用方と共に一人役仕一つ有
瀬連方　九ヶ村
瀬連　諸鈍　手安　久根津　池井　古仁屋　阿木名

伊須　蘇川
東方　十二ヶ村
生間　諸数　勝能　浦　網野子
亀野子　勝能　嘉鉄　野見　清水
実久方　十三ヶ村
薩川　芝　実久　阿多　須古茂　清阿室
泥地　無路　嘉人　西阿室　華面　花商　伊義
西方　十四ヶ村
西古見　管鉄　華天　久慈　古志　笠川
小名瀬　阿鉄　押角　表志ともつ　三浦　武名
宇検方　十四ヶ村
屋鉄　阿鉄　平田　佐念　名柄　蔵戸　須古

湯湾　田検　芦検　久志　宇検　瀬連

大和濱方十二ヶ村　毛陣ハ屡村

今里　志戸勘　名音　戸円　金久　大棚

湯湾釜　内面　毛陣　大和濱　恩勝　津名久

里程

名瀬公廨ヨリ龍郷官署　陸路四里　海上五里

龍郷ヨリ笠利官署　〃三里　〃三里

瀬名ヨリ古見　四里　〃二里

古見ヨリ瀬喜田ヨリ住用官署　五里　〃六里

住用ヨリ東　五里　〃五里　陸連ヲ同シ

東ヨリ西官署（侍気　名瀬）ヨリ宇検　〃五里

大和濱ヨリ　公廨　陸四里　〃三里

人口大数

寛政十二庚改之

島中男女　三萬四千百五十九人

文化丑改之

島中男女之萬五千六拾六人

文化元子年用大改

四千五百弐拾九人　北十五ヲ之公役難通者ヲ除ク一村ノ任我病者ハ扶養者ヲ以役ヲ免ス

文化二乙丑用大改　但永病者及白癡唖ニ非

遠島人九　三百五拾九人

帰島人九　六拾六人

都合人数三萬五千四百七拾人

風俗（附録）

南方海中は孤島ゝて温湯の氣ちく唐土日本に異り春
長閑ゝる日和よく多くは風吹荒ず夏大暑ありと雖も
あかくまた秋山名の紅葉よく寒氣大抵の十月頃の如く候風雪
くれよく天氣清爽ゝて歸山の麓畑耕うち候旦夕より四季衣かたを
改く候へ共衣類は單衣とて左れ
何度すゝても一年に壹度の單衣一つ與へ多くは
何と色とをゝと判然ゝる與ゝる者
ゝ男情をとゝこゝとをゝ
女人は中古以下は農業を事とし一夜は月光の芭蕉糸つむ
つゝみを伐ゝかゝせを府の女人ゝすく女はや岡
野ゝげゝて扇をそゝ

猿のめく頃身の供るもの多く俗衣そは大人一回ふることまく
俗価●菜の花こまう節は大和の行役のとき仕のめか無人助士校の
書娘まで外留木俗の西おう茅ろ盆染ある
針すきとそ大和めの陣当南染のみく於二三蔵ろ今富にす
如回兵をする俗そ模様より米引三外をもって兵するも
里め共に幸に草原ちくことたく皆すあーるめれを俗地
もの子似か土ほちりの足の股ろ仕事ちー
下不の乳い雪隠そー屋は皆豚小屋の辺に回ろめ共無ろ又
海辺ろ物て新する事あり草もって及島焼の裏あれど通
跡そ味をいること故大和の人足を里をおとう家に一の疑あ
そのありきろ子に用便の五に大和の下践用うるちこまめきもの
よく九代字は狩更よく叶疑を人に同上に用便の後風の穴
に秋を折辺回くとう疑ー

鳴役又富家は雪隠の下る豚を富ふ事あり村に下る人は
肝を治す事あり不富の事あり雪隠の跡板明きと大和に
違い六七寸四方あり是をのて島人大小用一時に不雑と通
似ふ事ろり死れども見は課あり事を実を見ろ

チヤヂ玉之事
如回丁香と水島の玉を鮮きたるものを女は老
若共に夏は平日掛たり是はチヤヂ玉とう女子
とも矛一日ぐる如ろり

手拭之事
手拭の事をサビともふ回に干せるく様々六ヶ敷て

真紺地に染て芝山岡を
角より角を三つ折にそ
長くたれて羽根手拭を
狩衣の下女下人勤迄も成るべく新しき手拭を持つ
十八歳より以下の男子は花染手拭或は紅絞り木綿絞
呂敷袋を腰にさげて飾とす本島製の真紺絞り手拭
は用ゐ時青く染て宜しからずとの事あり隣る班
寺羅宇あれども落るとは尤もなり

ヲナべの事

狩は男女共六人宛集り銘々茣蓙を持ち
吸ひそ木綿を引芭蕉を繋く是をオナべとゐオナべは
狩仕事とゐふ事なり男共三四人六人も集り来りて
三綛を鳴一張を男女互に話し乗て伽をするなり又焼酎
類を持寄て女に勧杯をす女共木綿は一夜に維ク三つ宛
引て止るとなり十月上旬村中馬物納掃除をす午晩より晴夜
あれば女共十人廿人集り木綿を繋ぐ馬物納廣き家一軒借り集り
木綿を引芭蕉を繋く是をヤンメオナべとゐ是も男女
集り三味線歌を伽をすること前に同しヤンメオナべは庭
仕事とゐ事なり西隆りそれ火の処切すそれ置て夫より晴夜は毎夜馬場に集りて
れば火の処切すそれ置て夫より晴夜は毎夜馬場に集りて
仕事をするなりヤンメオナべをゐれば家にに集りそ
仕事は止め西隆てより我家にに集りて庭仕事をするなり九月九日
又馬場節掃除をす日夜より庭仕事を止めて来年春迄
迄い前にゐしく家にに集りて庭仕事をするなり

ユタと云ふ女の祈祷をすることあり女のみの共は是を再
改てユタとも云はずカンカナシ（カナシとは様に美しきたふとき）と呼ぶ又一
名の病者あれば何百の隔てありて何事を取救すべし
すれどユタくるには必病者身許より云ふことあり依て豚を殺し一家親類を呼て
ということは男子は婦人の如くに泣き悲むことあり又ユタより病者に災をなし
とふくは男子は婦人の如くに泣き悲むことあり又ユタより病者に災をなし
振舞片平はユタに礼物とて米等遣すことあり又ユタより病者に災をなし
ユタの礼米等遣すことあり又ユタより病者に災をなし
災ありと漸三歳の嬰児の病に腰（ワキガ）草とて腹に茸生したる病
あり漸三歳の嬰児の病に腰草とて腹に茸生したる病
子の胸に災ありとて快気すべきやうなくとて胸に十二三ヶ所を焼
ヒタ焼に災せしことを恢を面さす死去あり実に実状の
病ありとすべきのすべき悲しき事
奥蝦等あり奥辛両毎に川にサケとて白き衣を上より
着しシトキをとり水をそゝぎ祓ひ清めて
祝に焼酎を呑又し口ごもり
何ぞの祈歌のすまして一生辛両毎に川の出てユタ同様に
し帰るは一家親の女とも白水あしの迎と号焼酎面育
特奉ることあり
「泉下し国、つタバタ大次岡あるべし」
火の神祭とて五月ユタを宅毎に呼て地鎮の神を祭る
又九十月頃、又呼て歌きをすることあり船おには道
酒を造ること

児童幼女漫遊之事

一、児女五六歳も寄集り竹にて囲をあみ物を調くて一人は馬の形をして車を引廻らす一人は中に有て草の葉実を石て柔を扱らする形をして馬にまたもの八両手と歯を車に結付て廻る車の様子に遣けれ馬の遣きを進めんが為棒にて向を打たるたり引ものの廻木を車様るよつけてきりくと鳴る砂糠車のふ形もり砂糠盆のみ小時遊び流行す雛祀に右の図考

一、六七歳より十三四才以迄の子供打交て木を尖らし一直に地に投立候人うそを打ち手柄だけ就る木に他人のネンを取る多人他のを取る多を垂とす、打倒したり手柄より其ネンを取ることを主とす

一、六七才より上の男子にイハと号して図有もの木を刻て偶を手玉を棒そ地に打ち木心飛上る玉を様ざまに拵いて他の持の葉ぎキッチョと号ふ図有もの腸てうもの而る

一、破子投我落と里ら号ふ図有もの而る破子のうを弊取る、破子のうを弊取る、破子のうを弊取る

一、ネンゴ辻大木を下げて綱の口と口とを結び支に乗り立て他人に指らせて吾落ちそは綱を腸掛て指すうするなり吾落ちそは男女共にするなり但し図あるべし

一、児童寄集りそサメナンコそ遊ぶ

一、野に七八尺の石ズキと呼ぶ大を能く薬を落し矢の筈の如くなりて夫を投れを遠く飛ぶ七八人ル

寄り集りそこに投げて遠く飛ぶを多勢人数の常を
拵へて魁とす凱の上る而上て投膳負を手バエと
云下に在て此に指らせて投膳負を扠(オキヤ)と云
又馬場筋四五間の所に横に竹を一ツ立て竹を投矧近く
立またるを膳とす此たるを遠くすきやるを膳とす
弥衛にて後を向いて瞼の下より透くすきやるを膳とす
量を風と云扨々有る事たり右脇の上に取上げて投るい
思いの外遠く行くもの也扨又十間許行之
一男子六つの迷び唱々あり至て不調法矢は羽もなく何を
射るとも当もし悪く二三間程矢飛ぶなり
一やこもこやと号て春蕩のサンゲレあり男子是に集りて
俳細す棒に木を以て囲のめく是棒を調へて集る

一十歳牛くり下の男子渡に出て砂迷あり囲のめぐ
作り仮庵つくりワと号て集む又泥を小茶家程斗宛に
数多丸めて牛ワと号て庵あり其地を定めて双方より右の
牛ワを打ず遠く割れたるを負とす打ば互に
云つる言詞人の牛ワ負之手ゑ打れ自方が牛ワ金
牛ワにうれと云
一夏向に子れど男女十四五才より下の者川に出て碁ゐ
統の班ぐ後程の者ハ川に流ぐ
淫剛に落ちつき既に溺れんとする時漸くにして見付
くること夏の内三四度ずつはあるべし予此島に来ら
ずして今住する小石色の者ハ川に溺れ死
したりとも又十六七才の女も溺るを毎し見たり
恥ゑ更にうとしとてゆ

一人両手にて木を刮て夫らしき寸許の切り又は
棒の芭蕉を結ひ支へを久留に巻きそれを久留
勢よく捻るを棒の仕掛たる芭蕉にて折付落々襲
来り我陣にある時独(ひとり)残りある時は勝負あるまで
たる者の久留を脇ちたる木枝にて脇負の紮
は紮を二つ引き仕に逃見て逃えて二十間越たる時
脇負とす

一児童の遊にアヤベツマリケウとふるあり是は地に二七尺の輪
節を画らし其中に二人乃至六人を立も勿論其外に
の出来るに従ふ外の者より内の者を役すアヤベツマリケウとふて
蹴る手者を捕へんとする者は又外の者役すり彼方より
アヤベツマリケウとみて蹴る中の者は外の者を捕へたる時外に
出て中の役を逃れて今捕へたる者に中の役を譲る或は地

一児童の遊にアトウノトビーとふるあり是は二人等を以て
鉢巻をして両眼を塞ぐ家人皆前方より来りてアト
ウノトビーとふて人を捕へて家内に入る家人皆能かす家人の内一人を捕へて
手を引を逃れて人を捕へたる人に吾役を譲りて己は又アトウノトビー
家人とかえ次々に捕ゆれば譲りて捕ゆれば譲
なり

一児童の業ザットウ逃あり家人某り手を天鈍をして両眼を
塞ぎ人家の External の内にて他を捕へて我役を譲る若し捕人と
する時彼か地に落つれば捕へられず譲りて役を去る
一人へツマヅアウとふる声あり是は高処の柱に家取りはさく
エッサアウと声を立て柱へ移る時中に入りて捕ふる
をす

一ヤタッチヤリ　或人ルキと手を取て内と云う内に一人出ル
モ右外に出てんてするを出さず家族の
ヤタチヤリ　イ・チヤリ　コウブシメノ　ヤトバンシレ　ヤサアキノ
コウブシメノ　アンメンサヤキノ　アンモツクハヤ　イツチヤクイサヤ
クコウブシメノ　ネエブスサアキノ　アンモツクワアヤ　イツチヤクノ
イチヤ　コウブシメヤト　バン　サアキノ　コウブシメ
内のもの開く出れば入る時にのみ出ずに入れば
象吸呑コシとうて童左右手を通に入れび
折き廻らず打たれて動くものあれば
一ウニ　男女児交りて進ぶ　人の後帯をとりてつづく
前こウニとうてもの二人をとりて最後のアトつりと呼ぶを
捕えとし捕ニとせざるとするなり
一手長者　幼児の両耳の所を押へてヤマトミイーとうふ、
一男め五六才迄　幼児のかを牛つりつと手つ結を附て引き
歩む引廻る玩具ニ
一十四五才より以下の大童を鶏を追だす抱きて往来
交外にて筆はして遊ぶ物大乳を候みあぶら片手に鶏
抱くものなり
一サンキヤマノ　キーヨートウ
取り合て
サンギマノキヨーいつ　クハ　イセンドノ　キヨーいつクハ、両人向合ひ手と手とを
アレン　カナシヤ　コレン　カナシヤ　キウル　ハンダ
とうて両人の手の下を共にぐるり女役を合せてくぐり度
る印南も躍返す
一つケント、或人ル手と手とを取りケケントうとうつば
一番目の者手を挙げ家は児にその下をくぐる、其をおス

鞠打歌

アトミイ、アタゴウ、ンマダノ、ヨリゴウシヨウクマツリ、ヨリガウ、ヨルヒル、ツキンガネ、トムレバ、正月ノヨネヤ、ウンノハモ、ツマアワ、カシヤンハモ、ツマアヅ、ナアゼノ、シウタガ、イモレバ、トリノブウトヲ、トバシヨ、ツウコ、タンニヤノ、メイ…ヨナギヤノ、メイ…、ナイトウク、コノゴロ、オナキヤノ、ハネサカシ、アゴマシヤ、ダロサン、チヘバ、ハ、ドクノ、サンダケ、オドランナランノボウクウヤ、シヒレケ、イモシヤメ、シイヤ、サラク エールリ、ヤンヤ、ゴウク、エールリ、アゴガ、ノリ、シヨウタル、ヨマツバ、ツメヤ、ヤヤヅメ、コウヅメ、マツクロク、カンギワンゲノ、ハナアヤ、モロキン、マキン、ヤンガヨ、タブクロ、ナゼン、シウカイモラバ、トリノココ、トテ、トバアシヨ、

テウヨ、タツヨ、シツケヨ、イツチヨ、ムツチヨ、ナヽイチヨ、ヤチヨ、コヽノチヨ、トチヨ、ヲエカラ、タアカラ、ミイカラ、ヨウカラ、イツカラ、ムウカラ、ヤヽカラ、ヤアカラ、コノカラ、シヤノカラ、

婚礼は　初て人の娘を貰ふ日を選て聟
方より夫婦娘の家に至りまた日を選て聟
娘の家より至る泰山(たいざん)夫婦の外に両人(ふたり)中男四女(なかおとこよつのおんな)仲人(なかうど)夫婦
事(こと)終(おわ)て中男以上は帰り仲人夫婦あにあね両人附聟
の家に至娘未(いまだ)戸口に入(いら)ざる時盃(さかづき)を両人附聟
を聟飲み終(おわ)る後産(うぶ)の方より女童(めのこ)或人(あるひと)と合肴(さかな)
人の婦人に杯を遣す吸物(すいもの)を出す此時聟
も聟の方に来る時新(あたら)敷(しき)衣(きぬ)を着(き)せ又新敷(あたらしき)椀を敲(たゝ)て
飲富(のみとみ)は後(のち)同し娘(むすめ)矣(や)亦(また)聟(むこ)方(かた)に至(いた)ります

鈿箏

男めの鈿箏ともにまはと云即金花と云ことにて唐音
金花吉小萬金をもて做る今俗に能呂久米し琴に
用るものをとる入今の島人の用る箏より大し又菊形と
云其形つぐ菊の花に似たれいと菊は唐音きくよし何れ
もそなぎはの音より誤りたるとも又銀にて做る
ものいぎん琴

男子拾四才十五才迄いわ島

男子十四才十五才迄いわ島と何太郎何次郎と云其外
倭名とう頭のもとけもうけ杯とう元服の後島の名に据
て名のる事もそ萬葉集の字の名號を用い元服
のもとけ也おはる也圖にも出す又名はかる倭の名のそ
頭上のもとけ陳陳のもとけ也うけ杯とう元服の後島の名に据
為のめく四才五才の比まで髪をかみそりにて剃まで
弦陽風のもとけみるたとう元服後島人男子のこけ
髪にたる也うけ杯とう元服後島人男子のこけ
マケタツとも云
真次郎

前太郎加那 長加那 ほなぬき 雄し 義加那 雌し まへも
男の加那 男の那し 阿屋 (ばつけ) 加美屋 (中ふ)
すす 牛 ― 陳上お長加寸 ― 真可 ― 貝陳上長し戸

長かす（ながす）女――大宝二年（ママ）
（ながか）
右加那之（中右朝臣）と加馬――長九寸 久米太加那（ママ）
名俗 久豊津女（ママ）

寿加那（ママ）――真塩

下男名

副田世代系の長き長寿の世代至短き卑世中貧小中位
年の者祝長久来の位法を立勤らる相成長寿経年の
沢小副系の長短を依て同じ者に年号を書載也有り来小
大概土寸松年し婦法とる時田大延村を見る

女名

鳥の女の名小結小十外法名（ママ）
太郎（ママ）可那（ママ）牛馬（ママ）真塩鍋（ママ）真阿（カ）牛水（ママ）
是等の数を内加那（ママ）恩別女の名の下に付る時小後の種
おの差のあり又男子の名の下に付るものより同じ十五才より上の男子は
以下の子供より下々うもの十三歳
名法とも近比世俗の人の子供多く女の名も平和の名をた
とり川上何か――多娘小川か那（ママ）また俗のいとの糸名の名
つけよくまより其名の名の上を取付る伊基院小伊の
ほ女の名にとふべたきけれ小萬葉小なに書き伊和か那
大の名つくる男子もまたけの義なり

下婢下僕不公日春三月八申丑戌
丙子丁亥以上壱人出公又一人ヲ出公秋三月八辰未辰
辛未癸酉冬三月八壬子癸未悪夏三月八辰未辰
七日正辰酉三四未五戌亥
ケノビツレ家ノ減リ悪六未
子亥以上合禮出入忌
一周不得ルマタス悪日六七八九寅十丑子十二丑以上悪日
ニノレマタス悪日六七八九寅十丑子十二丑以上悪日
五辰以上庶変庶時事
採竹忌日六辰七戌亥八九亥子十寅十辰巳十二午正申二戌亥三四
五亥已以上ケノツレニ同レ
破前後悪日六七八卯辰午ノ為九十十二午ノ為十二正二丑寅ノ為
三四五戌亥ノ為以上ニノレマタス同レ

買下候、吉日乙酉 亥丙申丁亥戊 辛未壬午癸未
纒下婢 吉日乙 卯午庚辰壬寅午癸卯
受增 吉日六七八酉九十十一午卯十二正酉二三四五卯午上
萬事受納吉故婚禮吉
移居悪日六甲七丑八未九申十寅土未土一卯正午二子三戌辰
五申請友日十日四ツメ丑日四ツメ寅卯六ツメ辰巳八ツメ午未
四ツメ申酉六ツメ
内ヲトロカ六午七申八辰九子十巳土寅十二戌正巳二酉三亥四子
五申巳上内外意事用ト去ル 事多於田畠農作忌出野
猪倉 草蔭囲之東木做垣 水朝产名加之日擇ヽ做之
外花戸呂加又類之
親敌子散日悪日六寅 七卯八輌九辰申十酉午十一亥子十二寅
正卯午二辰巳三卯四寅亥五寅卯

植樹定礎忌日正未二戌三辰四寅五午六巳七酉八申九亥十子
十丑十二卯
營葬忌日春巳未申夏辰 秋辰寅冬寅巳午
返罪悪日六寅申七辰 九申十辰卯十一午酉十二卯正寅二卯三四巳辰
五寅巳 吉吉吉志能悪日六七八申九十十一未十二正二子三四
五寅キツヽ共ヽ不教生物忌日
三六九十二猶任意大忌
暦は倭の二暦を用

神事

能呂久米女祝主神之条怒呂女子返之男子あるかす
能呂久米の中に役名あり能登と云郡名古ト記
よる神毎年二月初の壬に
同四月之壬の七ツメに帰り
大神拳島の山神海神を
待印かな之能呂久米し
知次多共にす支配之
一名て本院体ふくろ
を頂戴して在所へ帰る
出里之子案の支配の名
下度事能共名之許文は里之よりいくす寛永
七年成出月代支配納用之通禁止す官司勝手物

に家を作り其に枚つ　多く殘れる家に
白米土器を出し能登久米に出遣はせる家
三月満干祭り稲植祭後　同三日新神祭新嘗祭
西向坊屋敷
向初午の祭まり
四月初午　男女隊　伊知奴神社祭同利祭神送祭同阿倍四社祭両日殿舞
祝隊きの
行列也
五月五日　依句競舟同牛競馬　二十才以下の
童子の菖蒲の葉馬二舟競おの分　同きせる迷輪の穂
の出揃ひ鳴物を整す同出らく祭依年
出多時に行　是雷の祭之
六月　稲刈祭同新穂花祭同穂井迷　醸ゆる依まり
七月七日　七夕祭同新盲祭七月の十六日祭先祖祭
同水口祭
八月朝日二日雨丁日高祖を祭る男女太鼓を打踊を
すること村中を廻り晝夜の差有　家毎にまり

殘よく廻り済し帰るまり西向坊宇検才二十日を用ゆ
各隊方は両日用る是八月踊と云島中大概如斯歌
踊あり八月踊歌と一個別にあり稲すゝ歌かとくさめこ
おこし又木曽し路杯云歌あり是は大和の六調子ぬきの
うたまり
紫指両日より一七高祖を祭る両日共に男女歌踊あり
踊に同し
九月九日神酒を造り濁迎ふ云て男女迷踊る今井権現
蒲生権現両社をまつる
同月濁祭種苗迷の
某家を終日酒宴あす〇祝か翌日赤豆飯調て
祝す
十月庚申並　とまち祭

十月祈日神祭新穂祭同ろら迷早稲物
十二月稲前祭吉日を撰ひ選抜より迷と同し同甲子迷
一年中の迷日二ヶ所の農業を罷ム
八日公私刑向切節の村祭摩崎祭り白酒を造る祝詞
田村に限るの東向切大ちよめ祭平癒盛をまつる
名蔵浦上村末次の有盛御
の山領釜屋吉女向切九月之向吉日を撰ひ祭る三月
大の月末を新陽祭とゆ二月初に壬あれも新湯祭ム
二月中にまつる
頼賀両日甲子に於る八月甲子あけれを九月甲子に
高社をまつる燈香立花魚肉赤飯造酒接墓に備へ
拝礼し一年中に甲子の日をまつる事不解
之知弥賀麻頼賀の日前の茅きり材木を集め小屋

作り田神をまつる村中於六才の下十二三才を限り白酒を
造り是を祭る祝文あり名激向切にかまり祭る
其祭文に曰
ヘにへと西ノ(田)神
中引付テ(佐野多)の東ノ(地名)伊津部田代(田圃)の真
カセ(稲架)ヲ殊(詳)バリ(ツキトミヤダリ)のヤセ子ノ稲カナシ井つのテツカ
セ(稲架)ヲ(ツキ)こるぞが○カフネがのテツヤ○ヲこサシ
トヲトヲコ(今云)トノ乳○ヤウシ(同柱)神酒や○阿ノ子ノ(はら供ノカノ立の念を入ねくりまた)鮮アンこヤハ
花カアヘヲ
阿陣祭社四月初未日海陸共に他方の人の地へ入り
来れを石塊を打見を陸に付未そもの
を其沢を得と流し通ら手れで石塊をなけうた
する(ニ)祭の十才許ら十二三才迄の子供一所に集り

替入口に酋某居之一日祭りあり
ハツブロ九十月の比村々童共種をろ〻祭として竹の
実をひてあつまる鬼面をよそほひ村中家ごとに入秡
をろ〻餅を乞あるき一所にその餅を集まとめ
を喰ふ一回に歩す

女巫死すれば即其戸を槌に入て棺の下に埋け胞衣西
三年の後石櫃に収て神天と天しちき或之と云
中古監官禁之到今古宮に其或多い回向に歩す
島中諸所山中又い村山之人を禁止ある處あり
是多い祖名久米の歌御即可那之葬場ふん
乎伝若夫を数ふ物ら〻ちの経ちん之と並官
禁之又物元すると云ものい反魯祝にあれ
又物元すると島人大い畏れ近あす

疾病藥用

不仁病ニ
癪病ニ
生癰瘡ニ
瘴疥ニ
發狂者ニ
婦人月經絕
男子男根大ニ
歳ニ時伊津部ヲ
中風病ニ
疝氣寸白虫ニ
ナンハ悪瘡多シ
大熱ヲ病ノ少シ
乳核氣遺多シ

芭蕉の生汁茶碗一盃飲ム熱気治ス

六七寸余廻リ六七寸各利ノ安民拾七
長サ六七寸余廻リ六七寸各利ノ安民拾七
見ル又伊津部米久保三十八九歳願名

宮村赤坊二十三才倶ニ八寸九寸ある物の間ニまり船ル
子供幾人ニ有之用ル事
不好男色　腹痛甚きい陵客皮を煎のめば治
越前スホマラ　拾ニまり八九人いまり
多まり止ズ　小瘡のはまたちとき根葛休治す
淫（ツヒナラ）　男子弐拾弐才位より次と淫心気せは気つよくなると云傳
島ニ有之事ニ
男女八九拾歳長命の者多し
髭長（ノビ）　のび長サ二尺六寸ニ成ル
男女丈　倭ニ同シ
郭（ツボ）抜（ヌキ）　きめ穴の
風顔　冷水をかけ数百ニ洗ヒ
婦人淫水（ツヒナラ）　米の洗汁の如く白水倭の事ニ

宮村赤坊三十三才但ニ八寸九寸ある物の間ニまり船ル
子供幾人ニ有之用ル事
不好男色　腹痛甚きい陵客皮を煎のめば治
越前スホマラ　拾ニまり八九人いまりは止ズ
多まり止ズ　小瘡のはまたちとき根葛休治す
淫（ツヒナラ）　男子弐拾弐才位より次と淫心気せは気つよくなると云傳
島ニ有之事ニ
男女八九拾歳長命の者多し
髭長（ノビ）　のび長サ二尺六寸ニ成ル
男女丈　倭ニ同シ
郭（ツボ）抜（ヌキ）　きめ穴の
風顔　冷水をかけ数百ニ洗ヒ
婦人淫水（ツヒナラ）　米の洗汁の如く白水倭の事ニ

醫療の爲森元氏并永田龍見ト云醫師數人を
試みるの間

三ヶ日迄五節句七節句

正月三ヶ日式餅をかさり祝物等條々の間御祝儀日代
官より日限ヶ宛諸向切より役々仮屋え出揃其人數
横目柔横目其外津々横目まで其人格の朝衣麻帯
向切横目次下の麻帯まで諸役目八仮屋まで献上
多人數故々二切なまるの
取肴一通り御祝儀相濟五七節句ハ仮屋本詰の座元
勿論名代ハ八夜目ニ罷出諸向切ハ何れも仮屋元へ出
次第御祝儀申上歳暮暑中ハ其外ハ諸向切役々廻勤
申ス事

盆祭七夕の式ハ侍ハ麻上下
つまり格ろ

男子八弐次下の帯ハ大紐の子供の如く後へ結頭上
もうけをもうけ名ハ何太郎何次郎と云
貧富共ハ七歳ハ初めて文筆の道さだ
招き上座ニ而酒宴を為す事古より仕来と云
諸横目次上ハ黍見廻ハ上髪ハ元服ハ前髪と云
二十五歳より上髪を立二十五歳より下髪ハ立ざる事古法
之近比二十五歳より上髪ハ立二十四歳より下髪ハ立ざる者
多人の好ニ而次第ニ之ハ元服ハ前髪と云ハ先ハ弐拾五歳より上髪ハ三十
五歳より下髪ハ立ざる下髪ハ立ハ事の禁しきも

ル間ノ後ヨサニ珠押ヲ云七ノ小ク古居ノ額ノ髭
又木ヲ作ル今乱ル之ヲ真鍮又鉄ヲ以テ倣ル
御士格ヨリ其人其人格ノ銀ノ菊形琉用向切横目詰
横目真鍮ヲ用ル章魚ノ丸ヲリ是島人津ヲ云
又形ヲ寶盒子ヲ以テ其ハ一ツ也形ヲ云添書ノ自
今ノ好ヲ添ル無禁
里正掟村ノ長ノ功オトヲ云功オハ真鍮ノ菊形ヨリ
用ノ後ノ押書ハ有是功オノ良也
傳曰金花ハフロヲ云本琉球ヲリ第ノ菊形ノ即
花ノ形ヲ倣ルフロヲ乱ル巴也是中山國王ノ紋ヲリ又龍ノ
丸ヲ云故ヲ琉球ノ法ヲ以テ書ノ形良通ノ事相見ル
是本琉球ヲ冠簪ノ免許ヲ禁止ヲ事起ル新補

碧ヲ本琉球ハフロハ金ヲ倣ヲ親雲上ヨリ以上ヲ用銀ヲ
倣ヲヲ親雲上ヨリ以下ヲ用真鍮ヲ倣ヲ
次下仁屋ノ類也ヲ云

山神祭文 三社アリ

水社貴仁之屋盧汝中萬
名ヲ其波喜ヲ屋 歌付
ヨヤノロ島ノロノ井ツケ
名 一奇ヲ
ニノコケウトキド山ノ神ゲスノ 神名
スノ神ガナレトリヤハチカミチヤケサヤス 神
リキヨリクサハナスナカイキヨラリモチヤハチヤニノトシテラ
ハムカウトシテナヨスヨリクサハナスナトシトシカナシ

是倭乃中段ノ扱ヲ同シ

能呂久栄老人御久盛三人老人ノ山神ノ方老人ハ

友佐加那乃方ヨリ人ノ来テ病ノ
保曽波加奈ノ
與多常ヨリ来テ病ノ
金神屋神屋ノ神等之
祭文
ミマフリシタホレ火ナンカナ
レチロリ神カナレイレノカミカナレ四角神
カナレ、ユタチノカミカナレサスムコカミカナレ
雨タリノ神カナレキトクチカミカナン
次上神降シ
コカネモリモチヤレケヌノヨキヨウ五ツ
トホレトホレセットホレナヘヌラタホラン天神ニヤノホリ乗
馬クラカケテケウノイトレメテ屋ガチマウルラヨリマクノチヒカセ
ナヘタテリンカカナンヤアリドン殿ニチヤリランサメホトゴソンアン
サメノハルニテヨサレラ子リヤミチラサレテ
送祭文
カヘライセトノ乗馬マリルコラレヤマコ
カネクラカケテナニヤクラカケアリミウデクミヤカチカチレヤクメンレ
ヤクノ〇ヨウリノコカネレヨリ下タモチ〇アラウレラ〇テルヘ〇ウ
ヒチヤ〇ヒチヤ〇テルヘ〇ケウド〇ヨマレヨルラカ〇ノラサレル
〇ラダニレカラサレル〇ノハルニチシサレル〇キナハニチラサレル
ナヘタテラサレル〇ノ角八ツノマトン〇足八ツノマドンクミヤガトテ
〇ラカマレルテンコサイヤ走ラチヘノクマサチ走ラレノホドタ

テ走レユナ。グリタテテ走ラタテテ。ハカサガタ。ヨマンイリ。メヘライ。テヘライ。ラトロレヤ。ラトロレヤ。コブレノハヘラキヤ。ラトロレヤ。フルミチトラレハ。カヤラ花ラトロレヤ。ナヘタテラサレハ。ヒテルラトロレヤのトロ(走)クニハラム。ムタノクニ走ナ。ナルヘユタルヘユ統

行盛祭文

毎年二八月七日願名ノ氏名ノ祝名久米是ヲレフニトヲ名勝岡切男俊家言ヽ富ヽ

行盛ノ嶽アラリヤ上サスヤサスヤサレヨーコノ明ケ島カ上岡カ上大城盛ヨミ神ヨヒ男願名ノ新立ノ殿ヤハレレノノレニ俣大嗜友野兄城金クヌキニル尼ノ君大美田ニハノ盛ノミ神松ノ君ヲコノ君ノミ神アシヨウ主主ソヘカコノル阿藏レラヤヨコセレテヤヨヒミ神ヨヒ男シクウイレヤノヨヒミ神ヨヒ男穴ベラロワカコレタラヒルヤラレヤナキヲレヤヨヒミ神ヨヒ男古見城ミワレハロヲヒゲナメヨセケナメヨヒミ神ヨヒ男宮寺ミ宮カレウラヒゲナメヨセケナメヨヒミ神ヨヒ男統

死葬

姑死ル者ヲ穴藏ヲ土葬ヲ火葬ヲトヲ今ハ多ク火葬ニ式ノ法則ノ如ク行ハル骨ヲ拾ヒ納ムル器ハ如ノ字宮村又同岡ノ手花(テケ)部村ヲ有之鳥甕ト稱シ一年忌ノ其骨ヲ洗テ先祖ノ遺骨ト一所ニ納置ヲ年忌ノ中ヲ納ムルヲトヲ有之又ハ墓ヲ設ケ其中ニ

死せるものの如くを身ふるを恐し男め多く症入注事
あり富豪なる、またけ多く貧家いまた少く注ッよ
上手下手あり上手、米糸打を襷ふる遣下手い
米を打遣ふ多ある依り注辞し色、あると云
故なり打注或打注と云俗辞へ上手、何如う
人し泪を流し様ふ注ものありと云注の上手庄ふ繋へ
ふる事と

雑話

屋木内同村の鉄西人宮朝の子孫と號するもの多し
深堀氏を為の子孫の乱ふ同ふ名あり又欣拒を付
るもの多り不詳
湯湾北部ハ本と屋嘉ふ湯湾村ふ庄ふ其人温厚

ふりて自然気流ふる世の人の来由伝聞
ふる事其生甚貪之世俗糖五郎ふ呼名し後ふ本琉
球ふ渡り幸国王北太子治て宮冬ふ行逢本琉球
国俗ふ國王摘子初て武神ふ冬ふ給ふ金中ふて何人
ふ不依初て行逢ものハ頼文ふ夫た布結構ふ取ふ
親方杯ふ被召出事ふ由湯湾五郎ハ其身の賤きを恥て
道城ふ入迯たるふ國子の供の面ふ賤ふ者見へ来ル
道をかへ武神へ冬ふ給ふ又本島ふ湯湾五郎ふ出逢
故其名を問ふ秋山の野夫湯湾五郎ふ名乗る故ふ
古の法なれは貴賤ふ無論別義文ふ給ふ氏時治
て帝井の中ふ梅司の官舘蔵ふる云其歌
おらんとするよ不叶ふ梅司ふ

石蔦於浮　不能於沈　雖倣飛石增
却好布井出没去今ゝ本琉球佐土山共原親
糖五郎梅司の子孫今ゝ本琉球佐土山共原親
方寸の元祖也

有度書寫道

平梅司身丈七尺五寸力拾人ゟ勝逸たり伺ふときゝ善
男島の用事ありて帰ゟときゝ便船を請しゟ船頭
荷物ゟらん運賃銭出すへゝと云平安子私舟まら
ありてゝ三斗入の俵を七里代海上ゟ有ゟたけ
船ゟ卸さゝるゝ毎ふきさゟ着ける時は一禮ゝてゝ
さる

奉中山王ゟ申ゟ鎮西八郎爲朝の御子孫ゟて中頃
絶ゝゝ大子無之女子まゝゝ跡目相續の時男子
石被成御座無新屋鳴の農民男子器量他ゟ抜衆
人萬敬ゝ大徳の長者ゟて有之御女子被下其男
子ゟ國王の位被ゟ請ゟり給ゟ子孫續来り給
ふときゝ日本の將軍家へ三年ゟ一度宛の參勤有之
薩州ゟゝ琉人押への爲ゟ御參り有之由相見へ候
島人の覺書乃中ゟ此の如き文面有之候

慶長年中ゟ唐土異國諸の小嶋就中ゟ隣邦慶島
坂津山川七嶋商船琉球野覇湊へ參り商賣勝手と
有之荷物諸船頭共持渡候御印の眞朱或ゟ五井ゟの
俵を三斗ゟ三井ゟうゝ古銭六拾文宛ゟ高賣之有

こ付ニて古銭弐百四拾八文程ニ相究居候由
近須上方謀致人有之候折節大学寺殿山伏の都足
讃岐坊を召列薩州迄罷越候處降雨ニて頼下宿候處降雨ニ付大学
寺殿吉継共ニ討取可被遣候旨琉球國ニ可被遣事
来候頼来候人を討取候事難成被思召候球琉球可被
遣候間早々討取可被遣由ニ付て討取
候林無両取違候ニて鳥津の鍛錬ニ被思召琉球
を不被遣候而討取可申旨ニ付て彼の讃岐坊父子気
者故樺山実懐守殿ニ討手被仰付首尾能討捕申
大学寺殿讃岐坊善堤所ニ大奥寺殿ニ被相違為
忠功琉球國ニ被給今ニ七嶋の諸船頭ニ被帰ニ琉
米積ニ上納いたし船ニて罷下り琉来ニ船ハ積入置

候ニ為申請由候ニ寛永乙丑ニ
當濟書留大嶋ニ御役樺島甲ニ取被ニ昇ニ
ニ付ニ勤役申ニ承知候樺書記置候ニ右ニ丑ニ
助樺御横目樺ニ近須新納次郎右衛方樺被置
候嶋中御取被向ニ今次押面被相行候ニ
次第有之候
嶋人掏摸仕舞候ニ後ニ
不詳
嶋中依事科童ニ科ニ五斗ニ咄ニ定ニ磔ニ
淳ニ

當湾の東間切の者ゟ武藝好ゟ徳田某ゟ学び又大
筒を川崎家ゟ習受大筒大小數十挺所持つゟ其節
人相勤家ゟ大島の東ゟ當亥無人嶋有ゟ由承五般枝帆
を左艘造立従弟並家僕數十人召列順風球見合ゟ
乗出し候處無人嶋の磯迄ゟ乗付候得共小船ゟ上
荒波の磯迄ゟ舟ゟ小ゟ波の高ゟ舟寄へき場所
なければ無人嶋球走廻ゟ見候ゟ大サ八九里廻ゟも
可有ゟ無人嶋ゟ久申人家ゟ不相見候得共作場
らき處ゟ少ゟ肉ゟ候ゟ相見得候磯近ゟゟ人家ゟ
申處ゟ無ゟ候ゟ辰巳の風強ゟ相成無是非方立つゟ
本の大嶋へ取帰しなら従弟ゟ迄ゟ大嶋往用此度ゟ破船ゟゟ
従弟ゟ迄ゟ溺死ゟゟ――候由無人嶋一件ゟ別ゟ記ゟ

西間切楚川ゟ出ゟ氣ゟゟ久嶋人次郎ゟゟ者人の下人ゟ
ありゟ馬球飼ゟゟ女馬一夜ゟ二ツ角ゟ生又一夜二ツ角
落其角長ゟ周ゟ出ゟ五寸計ゟゟ四角の如ゟゟ角ゟ
生ゟ處の騎馬ゟ異ゟ形ゟありゟ都ゟ常並ゟ
劣ゟり新納仁郎其角買ゟ大和ゟ持參候
東向切當湾無人ゟ水ゟ式年五ツ大和ゟ帰帆ゟ来の
候ゟ入津ゟ白久數滞船ゟゟ退屈ゟ由ゟ事ゟ思ゟ當節
招請ゟ候ゟゟゟ

文學

詩文章　文雅の者一人も無之

經學　四書五經の素讀の外見る事の不レ

書流　大橋流夢円流の二流有レ之

算

和歌　大和の人〻上達の者多し

唐通事　諸国人江芸閩人の歌、ナカと冊ニ、衙上儒ヲガラシセルラフノラフツカレユヤレ
三国通覧之巻の人の歌、
清朝人の文
俗間人ハ不會讀在行的沒相于有今日訓官有名島清右衛也
唐通事ハ此ノ讀不レ得ナリ大ニ此ノ暗ク得ナリ大ニ
唐通事ハ此ノ讀不レ得ナリ大ニ

佛教　佛法を信ずるものゝ多く何よりも知れ和漢古今の敎
とさするもの世ニ一番る一向宗からこゝもの神道ハ儒者ニ向ふ有
儒道　儒道とゝもへき事絶てしてゐる

蘭學　絶てなし

騎馬　馬騎事の指引ニ才の童子ハ馬ニ乗まゝ男佳ニ名知
無役藩方

弓

鉄砲　鳴鏑射まゝとり伊奢沙流此方日置流射方双方ニ近
ニ而如此ニ得り組ニ而ハ二ツの射方ニ而ハ
術向ニ坂本海老原術ニ有之

薙刀　刀法久向流ニ人ニ

長刀　琉球ニ法ニ傳ニ

拳

柔

附方　當流中筒原流ニ得

戯術　島人の戯行ニ好事ニ和の人ニ因ニサメリ一派有

ナムコ等の事ニ法ニ因之

將棋　さし者ニ

圍碁　上手ニ向ニ

柔妙古　サメニ同流行ニ

估目　島估目ニ一派有ニ指ニ才ニサメナニニ物の勝負定

劍術　當流ニ後ニ出ニ結流の門人ニ今絶てゐし
（一ニ劍術ニ次ニ有ニ）

三味線　猫皮又紙にて造るもの　琴音を写すと云ふ　本邦にて専ら用ゐる　米國にも専ら用ゐらるゝものあり　琴と作ると云ふ　本邦にても勢三線の事歌の用に本邦にて専ら

踊　歌の調子より変ずる又名ある流儀ありて各流儀ありと云ふ

生花　九田流其外数流ありて各流儀ありと云ふ

茶湯　香合ひ類その流儀ありと云ふ

物　弓矢を弄ぶ

漁　釣糸は木綿糸又は麻糸を撚り合せて造る　沿海地にては多くこれを用ゐ　遠海にては多く麻糸を用ゐる

魚　弋刺舟にて魚を突き取ることを専業とする者あり

投網　海辺の魚を取る

猟　猪鹿等を専業とする者あり　弓鉄砲を用ゐ　罠を設けて待ち取る者あり

鳥罠　もちの木にて製す　もちの木は深山の奥地に生ずるものあり　猟人専業とする者あり

職人　大概各地中職人備るといへども又各地中用に不足

木科
- 畳の表　琉球満政頃より専ら作る者多し
- 大工　名儀未詳　其外多し
- 船大工　名儀未詳　其外多し
- 金具　東京芝浅草両所に住む人
- 木挽　牛屋と屋敷とに住む人
- 建物師　東京芝と屋敷とに住む人
- 石工　主として墓石を作る
- 牛皮細工　鳥獣皮より来る

外科
- 西洋医術　名儀未詳　其外多し

鞣作
- 鞣皮　西洋医術を以て製す　其外多し

鍛冶
- 鍛冶　名儀未詳　其外多し

鋳科
- 鋳工　東京芝と屋敷とに住む人

竹工
- 豚児根切　名儀未詳
- 漢師　知行取和漢

三絃師
- 三絃師　名儀未詳

歌舞

御式正婚礼の節祝儀の唱ふる歌を古雅の調子にて三線にて唱ふる人少しあり　能の謡ふが如く仰ぐ如き歌にて

日や月かゝしき大帰(ラト)と
姑海の赤珠山の白玉を
あねちつゝよ泊うと三や哥とゝ和
ま御(ウテル)ま

送(ウクリ)人(ケラ)唱(ハヤシ)ら列(ツラ)と送まる左海部籌方の人より依望唱
帰やか那ーよらいきよら九度まる男
おう人等やからめ
ゆるよしやあらわ

迎(ムカヘ)人(ケラ)　吏方の事をふうう浪方のとの上
御保古理節結構なる六事通俗を違を抗理
節ゝる鳴まる毎ゝ解ゝる事あれは其意ゝ合
文旬野なれゝ毎ゝ戒歌の文句正ーく嫁子人のゝ句なし
大概大船趣ゝ次ゝ腰ゝ解置ゝ本流球の古前
凡ゝ趣向同異

今れわこらーや何ともはきり何ゝ今日のゝあち
たわれ
何ゝ今日のゝくあれかー今日のうれー日出度事ゝ何
もの目出度事よりも一倍ありゝ云事

流行節時々の流行の歌ー

大船ゝ人ほよ乗るれゝ大島の操う船きやまちや
ゝちやのぶらんと
廣ひやかたゝ一ひれみふれゝ世ゝ座敷ゝ宗の
つまる

夕部がてや村内だろーちいゝまんわりそくとせと
いきの泊りそこの泊り奈波筥路八島ゝ

一番なるべし　しんふ赤木名商切品物取揚三番をと
るしんふ赤木名商切品物取揚三番をと
十二ひものゝ私身こ
津代や泊を押立添柏大和山川み一夜をしる
津代濱を眞帆引揚て一夜をしる山川み
夢ろよ山々水のみが雨ふる
ろひいたや橋の旅をしる雨ふる
雨又ハ駄の鳴ん迄ふる道ぐさ
待ちえと
橋の事ろよは足者を
矢留、ゐら馬乗ちうのきう至富流の馬乗をる
ちつぢをりこいち濱北吉ら那せの茶ちや碗ゐら茶

濱ち待ちえと
向への平ゝ白駒が見ゑ橋の上ちや茶ゐ濱ち
赤き松平のく唐笠をしる北きう至當吉美流の唐笠だ
をりこちかるくの唐の那せの髪だ北ゑ濱ち
待ちえと
下ゑ及ゐら管笠ゐこへ
山島取てくゐ籠面をちう龍神の後ち
岩七北美流
山の巣立子手くだを廻しる籠ろ鳴ろてゐし
みとふゝやか那ゝやを鳴のくふ志んきやちとやう至ます
か那ゝや原ろ咲うろ百合出花ちとやらせはこゝ
至ちゝとゑ出ゝしとをうんな出ちられり和の身ろの

出らんとわきやうあるし出らんを
ときだと多の玉子
祝へとせめられて歌よせのれと琴も出ぬ
琴も出ぬとせめられて自慢の心静にお茶もかれ
久宝波屋之
こゝときく中宵あるならふらん人もとも
さえあからしゆうてせつ濱ますとはまちとも波も
すてちよとあらかめくてうのようなるゆてはへまろ
濱の里浜金とろう梅の宮塩や酒とうよう其さきはる
ゆくてとくすう

豊年の高い稲まれ栗ゆれ今日やまはよろよ鳥との遊びのろやとも

うけの立のまのき
阿保と久利節
あゝ一越る水やへあろれ
真阿須韋我奈於毛禮
ちやむ那の花やくむそまちよう百合子の花や咲ふ
りてまちよう

二字語三字語長短雑語

父母 夫妻 妹 兄 敬し 姉と当とゝ時ハマシクワタ至極下品ニ云時ハ姉のマセ大和人下品ノ妻女娘杯ニアチとゝ同ノ時ニテセニゝ
父 伯父も同し若きうチニ 祖 父 又ハ祖父ガワとゝ
孫 守 児詰 史 又ハ御奉公人 祇 神
女子 異人 男子ニゝ立派ニゝ 悪人 愛人 産子

病人　太部女名男子ハ　私　御前様　未
御出被成　御揚被成ル　喰杖　斧　山鉄　御膳
御取被成　諸帯柔ク　何よってとレコラタてをハ婦人月水の出あわたとタキキャブリとハ　馬鹿者ハ乳の按
婚礼　足折　足切　伊毛津良ケ　這裡又つまとハ此カとハ
裡アチとハ　茶宝清久和ス　大城　池　那
衣　晒布　男根　浴日　浴槽　京都着江戸　甚所
家　椽　砂原　叱　白酒　物言多人　物駒　取次番　旦
那様　御内儀様　アリとハ　幽霊ハ　酒癖
與申者　御祝　御世話　駿　江寸保　今　須戸自天浮朝
酎　旅ケ屋久毛能カス　早ク　武佐志人　三線上手　手踊
雪隠　小便　老人　耳龍　手切　明日　十方奈之男
御息才　莫道　何様

仕候得者　揚女　村ノ名　取女　稠　仕事　日那　恩出
阿良世ベ　男ノタマガルとき　又アケノ女の　是又　始而神事宮子供
麻奴　能與貴人　頭　櫛　自書度女子　知加津貴女ハ子又つまとハ
新畠　毋蔵　柄酌　海苔　加々理　杵柵　手杵
下婢　下僕　瓶子　山峠　畦　不成　何程
千ト江髪　赤物　白物　太物　奈里麻世奴　物置所
石是　古伊世　波伊迩詞　杯　鶏卵　生　古良ケ
貴多奈之　水世話之貴　寒冷　喧嘩　養生　晩　同道スベラ一所　青物
投々　頗ル　泥　不思儀
残念　不便ナ事　柱　蒲団　路傍足　沢山　ナカ於タノ天
蔵　乱　戯　袷衣　頂髪　柿　樹　莫迦
茶碗　被ル　小窓　職部ニ湯　不好ス　糠果

以上詞之太概琴記邦言依其村詞之長短清濁皐
音齒音有異見人推而可識得也尚草木鳥獣等之
名者其帖引合可視也

大嶋上古傳

往古は大嶋の名と定りたる此大海原沖津小島より
以前に多く倭と付て詞つかひ髪は禿と衣服とても
日本の風ふりしとや折々の倭習り上京し官位等を
給りしもの有之と云名目詳
素戔烏尊天下りまし〳〵て此大嶋に
至り給ふ龍宮と官居を給ひ嶋人の云傳一奉りし
即蘇民將来其子孫今と琉球と越来家の元祖ある
其子孫多くてこれ越来の石垣湧川親方等の祖之由

琉球の事みて大嶋とあつかり給ひ此嶋の孫と不記
鎮西八郎為朝琉球と下りて給ひ或嶋へ渡り給ひて
三年あまり名願間切みやら村に居給事ありと申傳島童の口さがなし
大和詞の名殿内や御曹子やたりなた手石きやあ通ひ
と揚と平安子や石おきや右通あきゆひ（平安子の近来の方者なり）
子供きやあ（よく出来たよの略語）城の五男子の心也なり
倭の孫人孫〳〵孫人孫〳〵とは此嶋の歌之
御曹子の為朝之事傳石詳 今為朝の子孫と傳る
人嶋人と多し是又不詳

古石碑

享保十五年庚戌二月十六日龍佐泊深山乃中北田地内方の杜の代官より被露申出付役野山添兵衛より後深山の中田地荒地にて候水吉の何方北石碑洗込申候ゆえ堀出せ候所、今の崩巌に跡形無之旨記し候のまま今爰に記す

琉球征代之記

右者松の下陣を一之家大島落居之記

右同断之節之異本

御霊牌

貴久公御位牌観音寺ニ被遊御坐候何の比何の代住職の和尚が南林寺ニ而常ニ自分ニ御経を讀け花香を差上候者ニ観音寺住職被仰付下島の御海上守護北窓ニ御位牌を守護し参り安置中ニ候大ニ冥育廿三日例年島役ニ而ハ勿論詰の代官見守後其の役を後屋付し候人ニ而皆々志球次ニ志燈球冥育遣ハル

補陀山觀音寺　船着場より左の方
分國家より御夜候ものゝ右布志大慈寺末寺にて當
大慈寺出村と砂間屋へ罷居何れも支配同福昌寺
相談の上此城下と内豊国宗門より多納岳寺清家宗旨変
引替ゑ大島觀音寺豊国宗の方へ遣候由寶暦之末明
和年中之事に御座候此に前に當る役屋大熊村と申ま
觀音寺道路有之役屋引移方へ度觀音寺同様引直
し候旨相見得當分伊津部と有之檀入法事等急度
勤候中家都鳴中より末代迄事ゝ觀音寺用方
寺内觀音ゝ堂ゝ

（海船ゝ目標ゝ為ゝ昼夜ゝ一ゝ灯ゝ点ゝ）

神社

辨才天社赤木名村と有之願を以解社守人夫役を免す
山と神是ハ妻入休右ゑ内代官と砂新ゝ建立ゝゝ伊
津部の内と有之大和の山の神と異り候
の參ゑ鳴の山の神と崇昔日ゝ能呂久米
今井權現社平家侍平井權太夫名歌向切屋仁村ゝ勧請候
爾生權現社平家侍蒲生左内笠利向切屋仁村ゝ勧請候

嶋波大島能呂久米傳来

昔ゝ大鳴の西面ゑ近ゝ有之鳴と成島の神は龍宮の
一女二女三女ゝ皆女神ゝ有之しが大島の神の男神よりて
一女は大島の神の妻ゝ為ゝ結ひが日本の神龍宮
の乙姫は窮ゑ有之ゝ結ひが日本の神龍宮
喜夜ハ休ゑ女給ゝ一女姫と十人里北の沖ゑ

のき給ひ後も七百七夜あまりを経て御祠島
の嶽大人の現出ありて五人の能き久米を拾五人
の男根を木もちて作りまく女嶋なる一女の
御陰をねせしか一女神よふやく慙地震風波の悩なく
たまひ給ひて夫より今ま御神を汚撰りの中給ひて風波
穏ならしめ給ひ夫より今ま男根を船中乗合の人の数作りて奉る
事まで今此余の八百萬神の御神島給ひて後も神崎を
中又の後ならしめ給ひてよふやく晩地震風波もおたまり
中ぬ事あれば一の小島球合まで島を申伝ふ
また古人家ありしと申傳ふ

大祓詞の能き久米のすめの祓の条文の窮
安全の祓等の唱ふる条文曰

将来の御神名郎し國ら神名郎し嶋ら神の郎し
こはふりてなげしうしやうこまふ女志みそよふ
きれ志とるり那志和至かるり那志和至かるや
稲のり中ちやをたをりありうん乃みそ
そうしの郎しやれそてふ
ふり郎しそふかふ
明なる祓牛骨を肉の村中喰書に其祭詞の
まふうううをを将来かるし國ら神名郎し島の神
名郎たこ等ら
えうをを

逍雲の歌沼隆あり名跡間切伊津部村作

大能く内子に代て苛飢饉ある人の賓客諸野山の食へきものを賓取盡し後は食物あくなりしかば木と穀拾人絡死せしと云今亡魂年々其月比になれば人と其歌を聞人と集る其頃騎あつて
つゝ山登てゐれよ
ゐもくれよ
叶月を試類を數ふ其聲甚哀しくやむ

島中役目の始並島役と順

大親古い本琉球支配をうけ一島にも人づつ遣置至て偏の地頭職の如くは役人一島の惣奉行也慶長以後は島人より大親をおき勤其後琉球支配の古制に相替大親の名目を止め與人と書今與人と改め與人と書一方に一人づつ古は住用方と一に合て今に住用方と二に分て勤る故に大島七間切十三ヶ方は七ヶ方の内は見村御仕事近年に改る年号記す追て記す
地與人を村位付始め召立の節は其人うを有之當方島中に兩人也年向追て
向切横目そと向切と兩人つゝ向切横目は支代二一無扶持

にて島中の見聞をする役場也 係の諸郷の横目と同じく政
十三歳より牛馬皮掛の両村横目也て伝扶持米六日数
一日五合つゝ
通事無人格指五人 扶持大麦九石庵通事相勤候もの無扶持
田地横目 指六人 也扶持
柔横目 寺指六人 文化二丑八月十五日召取
委横目 白砂糖方掛 指三人 文化二丑八月十五日
津口横目 五指九人 文化二丑八月十五日
九人相減すの上同役をも吟味以
て仰付
勘定役 年々両人づゝ島中惣帳面持ち勤定
相談役 助役有之候 定四人
代官所書役 年々両人づゝ島中惣帳面持ち勤定
御菓園方掛 指三人 役指筆子扱に準す

火消方 三人 内二人大庭後屋方伊津部両人外村に無之候
筆子 寺指七人 扶持なし 大麦寺石を年七斗つゝ内二人に年扶持
但仕事方筆子師助生方相勤常に真役場なし
田地方筆子 両人 年扶持
扱 六指八人
重扱 六人 年扶持 内五人名跡方七人古見方
柔見舞八指五人 年扶持
功才寺百姓指四人
御島方掛 五人 柔見舞に準名跡方大和懸方瀬名方竜御方
牢屋番 二人 夫役 雑兵 島中割て自分充米を年七合つゝ
御蔵懸指四人 但外の掛扱也 右之内二人は亀之名跡方の務也
小宇治見廻指三人 立夫也 右之内二人は亀之名跡方の務也
井樋見廻寺指五人 立夫也

向坂井権見廻指立人　立夫迄仕免
竹山見舞訪所訪人　立夫迄仕免
川見舞訪所訪人　右同仕免
土手見舞訪所訪人　右同仕免
井手見舞指四人　右同仕免
指為三百指五人　立夫迄仕免　六役宅中より届今也
樋藤見廻訪人　立夫仕免　名前不知　相勤る立夫仕免　能眠田之年番立夫仕免
生越之定例不記載

観音寺見廻る人　立夫仕免
辯天見廻る人　立夫仕免
蒲生権兵衛見廻る人　立夫仕免　米良蔵在宅中より届今也
塩浜之廻四人　立夫当物成納る名前不知
浅宇指九人　立夫当物成納る名前不知

立山権兵衛見廻訪人　立夫仕免
田地六石切四人　立夫仕免

以上伊津部県人役所帳面を以て記

御士格、享保中估運田地千四百三石を免ぎ砂糖
四拾萬斤實統差上切る
估運の格の田畑を被仰付候得共其後龍之名字被下
候迄ハ是迄之通り芝名字之額を是迄相成候之通り
御士格之格を以て其後余石之御士格相据龍
芝估數格別の内取譯旦當の御士格之御子
雖準両人、高弐拾六石給り其上下人迄仕免被
仰付近来喜入休右之内代官之砌人指令相定

至百數五敵以下免其身是まての通其後ハ卿士格
之者ハ屋數五敵迄ハ免高弐百人ハ以下免無之ハ尚切
持の無人ハ其格ニ応シ石ニて申来ル直ニ現米半納ニて
被下候

卿士ニ家部ハ次人名字者ニ応シ藏候様被仰候

龍卿龍砌武仁西ニ芝實秀東ニ東清喜志西ニ
西直民東ニ林前織笠利ニ伊喜冥恒東喜祖父
東ニ泉長武仁東ニ森貞和紹屋喜内屋實周
西ニ武朝雲喜住周住喜應悠古見ニ向杜子央
次上格七人ハ屋數百高弐百人格人ハ免其後文政
十三年ニ至ル被相減下人五人ニ相定ル
東ニ積福房笠利筑儀和子屋喜内保補喜屋
喜内宮和喜東ニ林前織笠利ニ伊喜冥恒東ニ東清喜志西ニ西直民東ニ林前織笠利ニ伊喜冥恒東喜祖父東ニ泉長武仁東ニ森貞和紹屋喜内屋實周西ニ武朝雲喜住周住喜應悠古見ニ向杜子央次上格七人ハ屋數百高弐百人格人ハ免其後文政十三年ニ至ル被相減下人五人ニ相定ル東ニ積福房笠利筑儀和子屋喜内保補喜屋瀬名ニ東

次上ハ卿士格屋數五敵迄ハ免高下人

免ス

衣服制

朝衣　芭蕉絲ト繭糸縦横ニ織テ織ル之　蘇色ヨリ深ク
染緑色ヲ大袖周ニ出ス倭の麻袴ヲ始メ
諸人庶人格卿士格迄銀簪朝衣ヲ相用朝
衣ヲ服スルハ大帯ヲ用ル事ハ下ル廣帯也

廣　帯錦又ハ二ん子ニ類ヲ用庶人ハ下ル廣帯
用事ハ不禁朝衣ハ周ニ出ス倭の麻袴ヲ始メ
黄色紗ハ黄ニ廣帯ニハ奇ニ織物ニ云
有黄色地ヲ五ツ爪の龍の紋ヲ極メの上品ニ

宗宅ニ八縄
大島古来ヨリ此ヲ法ソ甚徳厚ヲ写

南

義	吉	難	宅	病	福	官	絶	義
絶	難	宅	病	福	官	絶	義	吉
官	病	福	官	絶	義	吉	難	宅
福	宅	官	絶	義	吉	難	宅	病
病	福	絶	義	吉	難	宅	病	福
宅	官	義	吉	難	宅	病	福	官
難	絶	吉	難	宅	病	福	官	絶
吉	義	難	宅	病	福	官	絶	義

八ツ縄屋舗ヲ如図張リ此自之
病絶難ニ當ルハ門戸日明ル
事忌縄ヲ自大小屋數ノ廣
狭ニヨル

北

鳥獣

丹頂（ハヤカワチ）　稗ニ翼ヲ休ル者ヲ白鶴黒鶴同シ
鶴（コノドリ）　秋株ニ多シ一名蒼鶴ト云ヒ又黒

家鴨
尺八鴨（シャクハチモリ）
大鵬婦（オホフクロモリ）
遊鶴（ユウシモリ）

猪（シシ）
狩夫谷
奥狗（オクノイヌ）

雁（カリ）
鶩（アヒル）
啄木鳥（キツツキ）

鶏　家毎ニ五六羽　笠利殊ニ多シ好

烏
花冠鴨（ハナカンムリ）　白雪ノ如ク班ラアリ大サコハルヨリ大
花鴨（ハナガモ）　鳥人神鳥トス三四月来リ嘴ヲ含ム羽赤色
秋鶏（アキツケ）　クイナ
阿加比慶（アカヒゲ）　四時鳥五六月巣ヲ構ヘ雛ヲ育リ土用来リ冬ハ漢ニ行カヌヲ以テ
鶫（ツグミ）
鴫（シギ）
青鳩（アヲバト）
胡蔵（コクラ）
白頬鳥（シラホオトリ）　こびうかう

千木（チギ）　ドツツキ大ホ
　美シク八月彼岸ニ米豚ノ類ヲ足ニ革紐ヲ付ケ放ツ
　ヤツリ土ト称ス

つばくろ
都鳥　波伊鳥也　黄鳥にあらず　花石岡祖に足たり
ツバクラメ　波伊鳥は音をかり名とす
燕　大燕　かささぎ　兎連鳥
ツバメ　大小
野鴨　ヒコバエ　鴨兒
ノガモ　スリカキ
鶏鳥　シヤリ
ニハトリ　三浦　宮津良
千鳥　ヒヨレヤ
ちどり
陸水鳥　紺瑠璃
ミヅトリ　コメロ
方目黒鳥　鉄漿の美、十二時を告鳴と云
カタメクロ　カモメ美
巴央鳥　エリマキ　トキサギ
ともえ
鴉鵐　バメキ
カラスシヤコ
班鳩　土ぐしハト
ハイバト
鶴　ヒサゴ
ツル
五位鷺　古事あり若夫婦あり　ヒキウサギ　夏鶏
ゴイサギ　物ぬきし後婦詩みしに依て
多く食い盡す、気つきて男ふに夫の骨心

牛　ウシ
鼠　ネズミ
田鼠　野鼠　地鼠あり
ノネズミ　ハタネズミ
気く打木に先を掘る
猪　イノシシ
松鼠　リス
猫　ネコ
兎　ウサギ
山猫　ヤマネコ
犬　イヌ
家毎に五匹指匹、
腸　腸月数を与音を我す　伊津豪
ハラワタ　腸道をたり肥す
名利毛奴　牡の陽道を米と合て陽気たり
ミヤウトウ　牛乳と云ふもの脳一匹を米と合て陽気たり
水蛭　ヒル　サセエン　イタチ科のもの人の見れは股をくんは人
ヒルコ　ヨモち死すと云　常に死人の汚れたる衣裳敷具に住む
カワタラウ　人にあたをまきす　相模
人にあたをまきす　相模
出羊阪泳より地を往つて
牛乳と云ふもの脳一匹を米と合て陽気たり
サセエン　イタチ科のもの人の見れは股をくんは人
ヨモち死すと云　常に死人の汚れたる衣裳敷具に住む
カワタラウ　人にあたをまきす　相模
人にあたをまきす　相模

ヒシチャ
家牛　ヤキ、ヒつじ、ぶょー、
　　は声を写せる名也陀
反鼻花蛇　マムシモン　毒気強くして人の首より上を食ふ
　　入り二月中旬蛇穴に向に四つ目のすり笹落ちて二つあり、牙を以
　　り人の虫歯をさせば忽ち痛み止る、胡黄の気を悪む、やっぱりつとみ上陀ぶ、
蜥蜴　オキヤ　守宮　ドうかし
蠑螈　アらタル、大さ　蝉蜂ビキヤ、
かう虫　寿め牛　竹ノ節、毒虫、蠍を以て人を殺さんとせず
蝮蛇カラハテフ、マッタフ、アヤ、ヤしヤコヘに、五色の皮あり
　　反鼻陀を差き込む　食に味より
蛞蝓　ナメクじり　蛭　ナイクじり　五たすとり
蛭蜂やまし、ククル、草鳴　蜘蛛　メエサ
蝦蟇　ワンハじャ　石竜子　イソマツラ　身色トカゲ
脂蛇　イツマつう一種　蝮　こしゃクムし　尺蠖
　　ナリムし　ぶしテ毒トンボ　カセリう
蔓虫　天麻の虫　蜻姑　イヌクリ
蜻蛉　滑虫　コンヤマ　芋蠋クワリムし

蠢虫　ムし　行夜　ヘヒつカラう
跳蚤ノン　麻蠅
壁銭センコウ　壁虎ヤコデクモ
ニ蛸虫クンボト　税蜂ハチ
皐蠭が　南オろまり雲のむきことあり
赤卒　ハカヘサゴ　蜻蜓　ヘエサゴ
ヲ子がこヤニクロ　蛉蜥　イこムし
燈蛾ノクワタン　蜻蛉　コバこャラノ
馬蛟トフメ　水蛭ビル
蚋　ニムし　歌舞　ムしタナカ　サクリ
鯰サクナこつう　沙魚　イま　はせ
泥鰍タすか　ぼら　不江不出ヲ、汚名の之あ
溪鰻　ヤチ　ぶ　補ふとあ
鱧魚　すっき
鮒
美居

髯蠶　アリ　オンチョムし
虱　しうヌン
蚤蚋　ヤネコン
蟻　アン
蝨　カセいう
蝶　ハベう
蝴蝶　カしヤン
蚊子
藜蚤　ムしりり
蝿虫　つマハしカ
螢

揆尾奥 せご
阿古豊奥 おきの実
蘇鉄葉 メイ
鉛鯉奥 かつをタタキを食人
奉坂 形ちをなす知らず
玉琳 テッキ
鯖
鈴キス
殻菜 こんりヒ
夜光仁埔
海蔭 スクリ
藏 マアノツメ
信用河蕊 望のりせす

田螺 タヌキ
永良新学奥 メイ
鮫 チンタイ
紅鰕 くるま エビ
蛆子
鯉 ヨヤこうり
石決明 マンヤ
毛巣 吐血を治る効有
鮭
水松 ビル
西施舌 ツメ
花腸奥 ハタヤ
月錦 玉貝

泥鰌 ギゴ
大小巻チを取る、大なるは三味線に張る
鮫の奥 カレイ
牡蠣
虹 こうじ
竹蝦 クルマエビ まて
鮫 アカガツオ
鯛子 ヒラ
白楊奥
綿菜 こうり
海蔓 ひとめぐさ
多和仁埔 ハッカイ

阿麻仁 やどりかた、大小あり屋の下に在る
九条匹 機
江魚 ごち 切奥
佳氣仁屋 信用内海にも多し味美
白海苔 こんな
凌霄花 イクセン
蜜柑 ミカンに似て小にして酸味多し
紋魂花 ケシに似てはまなす
賽蘭
杜若
水仙 トラヒル
麻良不久良 ツクラ 陰暑に一起ち枯る
木香花 モクこう
蒲桃 おうとり

鮹 とりを
桜奥 カマス
鯖奥 ニアキン
金箔奥 しび
狗母奥 エソ 高知一の名産、米糠にて海人草一斤加之煮也 石花菜 大久保にては松竹梅と称す
梔枝 紫苑若
石斛 二種 江苔岡潭抗の岬立派なる黒い実を画出し由
大葉蘭
金次蘭
萱草 花美
福橘樹 葉黒ク
波律久和奥 アカヤ
之花奥 ヒロギ、赤実

刺桐 レンギョウ
紫蘆蒲
野蓋 イチ
松紅 しょうり

藤子 佳用にす
夫栗花
美人蕉
山茶
鉄蕉 佳用にあり 鳥申の用古不可
芭草 河中に清サ十七の如く垣とす
竹柏 十七
雲山ノカキ
蕃椒 各植れす
櫨 千カキ たり
緋鶏頭 ヒケウマ つぐ大輪
烽心草 ごと
若竹
粽柏 ハアマリ
茶 カギナシ
穀
玉瓜
豇豆
橙子
生薑
楊梅
薤 ガヨヨ
苧毛
露盆子 つり土ン 葉を煙草に代ル
野蜀葉 こつハ
名花菓
茨 ピ耳
蒲葵 ビん
菜芭 コンキリ
粳
蕎麦
大豆
白豆
橘子 ミカン
韮 ヒラ
杷
柿 クくり
梔子
円眼荔支 は植付の木 菓木
淡竹 ハチク
石蒿
麻 トノキ 通にある用ル
落花生 チマメ
裾茅 こんマメ
佛手柑 つりん
蒜 ヘエル
鈴柿子 つぶらかキ
蔓菁 トコネ
野蜀葉
名花菓
木豆 オマメ
沢桔梗
石蒜 ネフト ヒルカお
萩子花 ハつカつう
水檑 ミヤマ
柑木 トラノキ
江蘺 いと切るにやにまし
桃
樟 クスノ
橘
柚 カつマル
楊梅
檑 ビヤノキ
梅 ムメ
芭蕉 しまき
芸苔 ツスナ すつき
棯相子 チヤキ いとつは
松黒樹 木カし 赤松ノ生 二尺位より大きりはかし
蒲葵 ビん
菜瓜 ろキ 山中にあり
茶 ろキ
珊瑚 ママブマ センリコキン

芹
蕹荷
雲芬 ウメモドキ
麦門冬 りうのとげ
薯蕷
南瓜 カボチャ
西瓜
甘藷 葉四季子根、一名にて諸国にて移植ゑる葉を植仕置ゝ
枯梗
錦苏支 トコロ
地黄
薄荷 ハッカ
蓮

水芹 ハスノミ
葛 コモキ
蔓菁 カブ
天南星 ひとりしづり
御前草 芭蕉
白檀 木通 アケビ
細辛
知母 ウ
冬瓜
葫 ノウ
鼠尾子 ヒヨウ
車前子
威霊仙
木耳 如膠 普唐物肥前と云所に
藤 植ゝ一ツ年を越ゑ候へ共、夏に至て枯る

青芋 トウイモ
竪蘇
牛蒡
芭蕉
木通 アケビ
知母
冬瓜
天花粉
牆瓜 ツケウリ
車前子
威霊仙
如膠 普唐物肥前と云所に
植ゝ一ツ年を越ゑ候へ共、夏に至て枯る

蕹菜 ゑと取来て我国に植置きしに茂生し又至四月と云ふと云
清百合 花白く香ありくに花咲く花を採り製すれば絶えたりと云
扈保奴美 一名不久美大木と云ふ花咲く時分に花を採り製すれば絶えたりと云
鬱金 ウコン 陰地に交易す島より来る 二種有黄色なり白き有り
阿久知 葉動揺くトあり 黄色をなむ
使君子 あくちの実は塩酢を上げ洗ひ上げ日に乾かしはたく
石南木 粉にして食物に加へ食ふ 二種、白汁あり 葉ナうのめん大なる
龍眼肉 木は堅く細工物に宜し 実ハ生熟共に食用 煙灰にして
知佐賀之 葉にて染る 大和にては仕立物屋に多く有之候人一人
薯蕷葉 南瓜に似て木立 味淡異菜也 葉ナうのめん大なる
栗蘭 山丘監 ヤマアイ 葉葉に似て浮色軍 一名茶蘭一種は香、味噌に煮て食ふ 腫物に貼ける 一名蘭蘭 一種は香、味噌に煮て食ふ

杜仲 生紙に製す　阿檀 從の紹系、

巴豆

加茂菜 キトリの一種 黄菊色に染 大根 山椒

八重鳥でも之もので黄色に染 王匊 ヤリヤス

天門冬 ノアサミ 茎茎 スミナ 烏人未在

黄 キビラ 陳朮 蔓菁 ハコナス 山薬

南南木 花白茎長さ五六寸 唐柔 萩色、生時良土五六升

沢藤多クハナ 花紅香ニ 沈香 木カミキ

杉菰稗有り 不久梁 ホンキ、在根の様に用ゆ 紙に染 白く至て軟か、八九月作ちる

之呂津久木 スベ

茶甘蔗 九十月の間 柔 芸薹を歩す、上作の地 二葉 烏人証

おま地に落ちたるものにて白砂糖を製す 必作るに人盛んにて食べば又也

蒲にがタとう喧飛まて草を食いつくします 山いしとうもの一花宝つく、木と陰と

蕈 屋如波之 山いしとうもの一花宝つく、木と陰と

精狭之 ムクラ 波之 せす 木の心を取り去て染物とます

金竹 キンチク　棒蘭

日、花 日々紅　殻 ヒキカヅラ

鐵 ムクキ　夾竹桃

梓 ヨメカラ

百日草

高苞 こりナ高菜

菊花 色ヘ

山蘇花 サルノコシカケ

檀 キョウウ

苦 ユーセンカラ

里芋 ウモ

我述 こんろウン 水辺湿地にもす芭蕉に似たり

開葉ことり 開葉なし、食味甘し

石草 ヒトツバ草科

黄 コゴ 二種

水晶

英珠 タイタン、珠玉刻のを上とす

珊瑚 海松の実にて下等

鏡乳石 半透、世路多きものの上等

白砂 食山の砂にす

礪石 ナベう荒礪、粟の大きを上とす

合礪 多く風山中

硯石 紙面に細東の琅

琥珀 琥珀とも云ふ松より出つるもの

石英 イシロ、天狗の爪

亀策石 大、大きは水三斗入

金山銀山に有

悪火 雨中に大もとあり 風神（キツネ）
呪詛のもとより起るところの悪鬼 キツネ 幽霊 イらしく
天狗 テンコカナシ 人をつくり又害を顕すことあり 飛天狐也
海神 至て霊、狐の久米の中礼つかれ祭る
水神 火神
屋敷神 本神
六竈神
中等無多の拳を神也
大島風病の祭 ハヌカナシと云人あり大七尺寺唐日本琉球所不
より美木多かを生ず 病めば ハヌカ和之に応若七枝葉の落ち
治すつらきみと云て牛の骨をもて祈上に掛置き修来足
ハヌがナシ夫婦と拳と云何かは両神由来不詳

（完）

U62854